微睡みに蜷局を

u_

（微睡みに蜷局を巻いて身悶えする鳥は…）

微睡みに蜷局を巻いて身悶えする鳥は、己の身軽さが齎す居心地の悪さを退けようと、骨のように乾いた目で、それが更に乾くのを承知で、泳ぐ海月の臓器を真下から覗くように光りの穴を見据えるしかない。洞窟は広いばかりで暗過ぎたし、そこに長く居過ぎたせいか。吹き溜まりが旋風に踊らされただけかも知れない。或いは震える埃が、カサコソと触手を蠢かせながら地を這う骨片共の血腥さに耐え切れず、鳥の姿を気取って天に通じる光りに遭えたらと思い巡らしただけか。それでも未だ鳥のようであるからには、その光りの穴を潜り抜けたのでなければならず、それならもう洞窟を抜けた外で、その外が或いは夜のまま時に抗って鳥を待ち続けた夜だったなら、翼を逆さに伸ばして休らえただろう。しかしどうやら目の前の暗さは、夜のように延び拡がる暗さではなく、相響き合い折り重なる閉じた暗さであり、入れ子のように洞窟の外がまたより大きな洞窟であるらしく、それに打ちひしがれて、つるりとした細い両腕

を拡げるしかなかった。洞窟の時が翼を退化させたのだと、直ぐに翼は諦めた。埃であったような今しがたの、翼の感じが両肩に残るにしても、行きずりに拾われてしまう悪い兆しの一つでしかないと合点して。その両腕も頽れるばかりで、その形を失って行く中に切り込んで来る細かな音の軋みだけが、鳥の背骨を支えるとも見紛うが、光りの穴は響き合う暗がりの眩しさに消された。それからは明るくも暗くもなく。

微睡む鳥の水盤に沈んだ左腕は蛇のように柔らかく泳ぐ。側に身を横たえる木偶がその尖った顎の萎びた球茎のように顔を水に向けると、水は底から火のような勢いで濁って鳥の心臓を掴み取り、木偶の咳払いにも聞こえてしまう心臓の呻く声は已まない。上体を起こして木偶はその細い裸の背を向け、そこに描かれた孕んだ狐の絵を見せた。孕みはしてもすらりと痩せて動ぜぬ表情の狐は顔により大きな硬そうな尖った耳で己の足音にだけ耳を澄まして真っ白い地面を何に警戒する風もなく歩く。足音は風を切るように斜めに跳ねて周りを脅した。それに心臓の鼓動が重なり、もう心臓だけで助かろうとも儘ならない。鳥の狐に気を取られる間に木偶は自らの萎びた顔をお面のように外し、珍重されるべき預かり物を扱う手付きではその左右の耳朶の端をそっと抓み、真っ直ぐ前を向かせてその鼻の頭から下を水に沈めた。その吊り上がる両目が水面を見張って鳥の左腕の引き起こす僅かな波にも睨みを利かせたので、左腕は蛇のよう

に温和しく濁り水の奥に隠れた。漸く狐の足取りが鈍り足音も籠もった。機を窺っていた心臓は一際高く呻いて狐の足音は振り払えはしたが却って狐の足先に踏み込まれた。「これではもう何か獲物に出会さなければ生き長らえまい。赤ん坊が乳を吸うように闇ばかり食らっていた訳でもなかろうが」と鳥は噂話でもするように己の冷たい右腕に話し掛けた。鳥の右腕は水盤を支えて棒のように細く硬く動かない。磨かれた床の半分が深く削れ、支えがなければ半分裏を剥き出した水盤は間違いなくひっくり返る。「闇の中の水なら甘い。腹を満たしてもくれる。ところで獲物をモノにした事はあるか」と木偶が、僅かに腐った水の匂いのする息で静かに尋ねた。左腕の関節の蛇のように細かく砕けた骨が疼いた。「右腕でなら」と萎びた顔の口が、粘るような泡を一つ吐いて答えた。その顔の目の微かな笑みを見逃さない左腕は、恐れ戦く蛇のように素速く、水盤の縁にざらざらした白い腹を晒して冷たい風に強ばった。目は紫に濁りその目が水に落ちるのを防ぐかに少し顔は仰向いて、水から出た鼻が息を水面に吹き付ける。鼻の穴の下で震える水は、その息に狐の腑を干した匂いを嗅ぎ取った。「それなら夢か何かに頼らないとな。」柔らかくて何にでも混ぜ合わさる粒々の夢、或いは夢とも定まらずに流れて行く、いや流れもせず水のように滞る」と狐の腑の匂いが嘲笑うのに、左腕は蛇のように怒りを溜め込んでも色には出さない。

細かく角や縁を欠いてはいるがほぼ立方体の石を、鳥は見上げようとしていた。未だ冷たい風に遮られて見付からないがその方角は分かるのは、洞窟の設計者と懇意だったからで、そいつは死んで大分経つが、洞窟の寸法にも増して精確に己の体の寸法を測って書き残したので、それそっくりの木偶はまるで風の音から湧いたように自ずと出来上がりもした。洞窟の設計に己の屍は含まれず、屍は風の音に溶けるようにさっさと消えた。綿密に計算されて洞窟の真ん中に立方体の石を宙に浮かせたのが何よりの手柄な筈で。

限り限りまで仰け反ったが、その立方体の記憶は朧に宙に浮いても、それが石として見えて来なければ、鳥は今にも首がぐにゃりと後ろに落ちそうな姿勢でいるしかなく、それを蛇のように待ち構えて仰ぎ見る左腕が、行きつ戻りつ水盤の縁にゆっくり肌を擦り付けて水盤の僅かにぐらつく具合を覚え込もうとしているのは、右腕への挑発に決まっている。右腕が左腕に狙いを付けているのは明らかで、水盤が間に入って戦いは辛うじて止められている。萎びた顔は水から揚がりたがっていたが木偶は応えなかった。それは萎びた顔を外してしまった木偶に顔がないからで、動きの取れない姿勢を微かに揺らして鳥がそれを木偶に伝えると、木偶は鳥の顔を剥がせないものか考え始めたか、思い詰めるようなので、顔のない木偶であれば出来ない事など何もないと鳥が宥めると、木偶は厄介事から手を引くように萎びた顔を水盤の水に委ね、強ばらせた上体

をあらぬ方に傾かせた。萎びた顔は自力で真っ直ぐ立ってそのまま水の真ん中に浮かび、さも水盤が自らの顔を得た形。水に囲まれると、児を失って、黙りの込む青ざめた獣の牝の顔にしか見えない。そうして牝になった水盤の縁を、蛇のように擦り続ける左腕にも、段々と牝の匂いが染みた。その様を木偶の背中の狐は斜めに身を潜めて盗み見ていたが、辛抱出来ず木偶から身を乗り出し、孕む腹を水盤へすらりと突き出した。直ぐにそれを引き戻そうと木偶の背が覆い被さったが、狐は身を丸めて躱し、木偶は水盤の向こうへ投げられた。鳥は影のように素速く両腕を捨てて、地べたに叩き付けられようとする木偶の背に乗り移っていた。

勿論水盤の向こうも洞窟だが、その先に開けた拡がりは、設計者から聞かされていた印象とは比べようもなく果てしない。恐ろしく幅の広い落ち窪んで行く剥き出しの濡れた濃緑の岩肌が直ぐ側から続き、その遥か下の巨き過ぎる鍋底形の暗がりは、何者をも打ちのめすように高い霞に掛かった洞窟の拡がりに挑み掛かって、目も眩む程ゆっくりと揺れていた。眺めに身を竦ませるしかない木偶の背に乗り移った鳥を軽々跨いで、孕んだ狐は生まれ付いての律動に身を預け、軽い足取りで濡れた岩肌をピタピタと足音を響かせてジグザグに降りて行き、見る間に点のように小さくなった。それを見失ってその見失った先を見せられるのが嫌さに鳥は無理に水盤の方へと向き直った。真っ直ぐ鳥を見詰める

水盤の萎びた顔は、吊り上がる目のまま口元を綻ばせて、鳥にその意味を探るよう促す。椀がれた左腕は蛇そっくりに水盤の縁を這うも、何処かずり落ちそうな気配で、肌は白さを増して危うい。

萎びた顔の真後ろの高い所に浮かんで回る立方体は、輪郭までくっきり見せてもやはり石とは見えない。少しだけ俯いた萎びた顔の耳朶が蝶の羽のように振れ、それに応えて濁り水の底に身を潜めていた羽を生やす青白い小魚共が一斉に浮いて水面を賑わせた。どれも尖った泡かも知れないが。釣られて左腕はすっかり蛇の姿で水に戻ろうとして水に触れた途端、電気が走ったように捩れて跳ねた。白過ぎる蛇の肌が水を酷く嫌ったに違いなく、それでも左腕は辛うじて水盤の縁にへばり付いて反転を繰り返したので、斑のある微かな風が起きてぬるりと水面を吹いて、小魚の羽はそれまでより広く薄くなって蝶そっくりになり群れで端から水面を飛び立つ。蛇の姿の左腕は、盛んに伸び上がってそれらを一つでも衒えようと躍起だが、水に触れた衝撃を取り払えていない鈍い動きでは、赤い大口の餌食になるものはない。鳥も左腕を真似たくなって水盤に近付こうとしたが、木偶は洞窟の広大な眺めの方を向くままで、その背に閉ざされる鳥も動けない。魚が全て飛び立つと、萎びた顔は息を激しく吐き、その狐の腑の匂いは水盤からも溢れて、それを嗅いだ鳥は、失った筈の両腕で知らずその匂いを抱き留めていた。失われたままの腕だが、匂いの漂う所にだけ

は確かにそれは鳥の両肩から生えて出ていて、「そんなもので狩りに行く気になるんだな。偶々見付けた瀕死の獣を嬲って慰み物にする手付きに似てないか。それとも獣の腐った脚に抱き付いたまま、屍となった見苦しい己の姿にでも先回りしてうっとりと願を掛けるか。取り敢えず風の音に怯え、死に切れない時の事でも憂いておけ。それとも怯えや憂いを忘れる踊りか、それは」と萎びた顔に冷たく呟かせた。「何だと、誰のための狩りだ。瀕死のままダラダラと嬲られるのを待っている獣など見付かるものか。欺された振りをしてでも、直ぐに身を投げ出して自ら餌食となるに違いない。乾いた風なら何も残さない」と鳥は怒鳴った。萎びた顔へではなく、その上でクルクル回る立方体へ向けてだったが、それは消えていて微かに何かが回る気配を残すのみ。その気配が鳥の後ろの遙か下の巨大な暗がりを呼び招いているか。それを已めさせるのに萎びた顔を味方にしたく、萎びた顔にそれを知らせたいが、萎びた顔がその気配とグルなら下手な誘いは命取りだ。そうして躊躇っている間にも鍋底形の暗がりは鳥の直ぐ後ろに迫るようで、籠もるまま湧き上がっては捩れて絡んで膨れ上がるざわつきに、木偶も鳥もじわじわと囲まれ逃げ場はなく。

　萎びた顔は何が起こっても遣り過ごす決意を固めたかに目を伏せ、更に俯くと眠り込むようで、声を掛けたいが顔は酷く華奢に見えて、声の振動を受けてでも砕けてしまいそうだ。鳥はゆっくりと水盤に近付いた。ゆっくりとなら木

偶の背に閉ざされている感じなしに近付けた。かなり斜めからだが水面を覗ける所まで来て、萎びた顔は俯せで殆ど額の生え際しか見えないが、その水面に映る顔が、見開いた目を輝かせて真っ直ぐ水を見ているのに鳥は不意を突かれた。水はその目に何を映すか。鳥の姿をか。鳥の後ろの鍋底形の暗がりをか。鳥は水盤の縁に触れる寸前まで来た。蛇がその無防備に晒された鳥の目を狙っているのは知れたが、もしその赤い大口に呑まれても何も変わらず鳥の目のまま水盤の縁に留まれると何故か信じられて怖くはない。萎びた顔の額が今にも水に触れそうで、そうなってはその目に映るのは殆ど水に映るその目だけだろう。少し伸び上がって、鳥は萎びた顔のお面のように抉れた裏側を見た。萎びて硬くなった赤黒い肉の凹面の中に、窪んだ二つの目が点になって据わっている。或いは目の裏側の神経の落ち窪んだのが、目のようであるだけかも知れないが、その点の奥に微かに煌めいて蠢く気配はやはり目の動きだ。その真っ直ぐ先の高く見上げられる方には何も見えて来ず、果ての見通せない拡がりがそこにあるのを鳥に知らせた。奥行きの片鱗すら覗かせないのが却って鳥の後ろの拡がりを凌ぐとも見えて。

その後ろを振り返ると独りだった。相棒の木偶は鳥の足元に俯せに倒れ、細い背中には湧き起ころうとする刹那の泉のような黒い霧が、軟らかい赤ん坊の肉の塊そっくりに描かれるだけだった。鍋底形の闇が見当たらないのは、間近

に迫り過ぎて形を捉えようもないだけか。しかし落ち窪んで行く剥き出しの岩肌もその先に拡がっている筈の果てしない洞窟の眺めも消えていて、それは鳥を蹌踉けさせ黒い霧の源に片足を踏み込ませた。そうして木偶の背中を踏んで覗き込む黒い霧は、背中よりずっと深く広く見え、更に少しでも蹌踉ければ呆気なく霧に呑まれそうだ。木偶が、踏まれている背中を振った。しかしその顔に鳥を仰ぎ見る目はなく、萎びた顔を剥がしたまま別の顔の現れる兆しもないが、それでも何かしらの凹凸が薄っぺらな影を入り組ませて鳥を冷たく拒んでい責めるような色を滲ませ。

　その色から、それを見下す鳥の目に向けて立て続けに唾が吐かれた。見えない鳥の両腕が狐の腑の匂いを撒き散らしながら鋭く振るわれてその唾を防いだ。打ち落とされた唾は木偶の顔の色に真っ直ぐ叩き付けられ、その顔は唾を混ぜ込んでヌルヌルと動いて鳥を脅す色で渦巻く。その色がまた更に速い唾を吐いて来ると、もう鳥の腕では敵わず鳥の目へと撃ち込まれるばかり。何も木偶の背を見下ろしていなければならない訳ではないとやっと気付いて、鳥は己の顔を高い方に振った。新手の唾は逃れられたが、それまでに目に入って渦を巻く色付きの唾の塊は拭えない。狐の腑の匂いがバラバラに撒き散らかされてしまっては、見えない両腕は肩から椀げてズタズタにされ、もう空中を漂ってもいない。

その色付きの唾塗れの目で見える限りを見るしかない鳥に見えて来るのは、艶のある肌色の水溜まりだが、その上っ面の渦は止まっていて石になっている。鳥ばかり喰らうのに夢中で子も残さずに死んだ狐の垂らす涎が、透き通る肌色だった。その涎の化石か。いや元はそれは狐の骨盤で、肌色は喰らった鳥の色が染み着いたのではないか。何れにしろ長い時がそれを円い皿の形に仕上げていて、その割れているのに気付くのは、割れ目の間に玉のように蹲る鳥で、洞窟の設計者の声が呼ぶとその鳥が目を覚まして声の方を振り向いて玉は二つに解れた。つまり蹲っていたのは二羽で、応えたのはその片方で、もう片方は声から身を背けて尚も蹲ろうとするが、却って割れ目から押し出されて今にも皿の上へ転げ出そうだ。その皿の艶に映る顔は鳥でなく洞窟の設計者に似ていて、それに向かって鳥の声が呼ぶと、それは応えるのをはっきりと拒み、独りで玉の形になり、進んで皿の上に身を乗り出して割れ目の縁に沿って滑って行こうとする。皿が傾いて、玉は向きを変え戻って来るようにも見えたが、それは何処へか逸れて行くようで、それが鳥の声の方に戻って来るためには、声がそれに合わせて細かく振れる針のように皿の縁を行ったり来たりしなければならないが、玉はその針から逃れようとする動きに終始した。それを玉と針の無邪気な戯れのように暢気に眺めているもう一羽の鳥は、見飽きてもう片方の皿の方へ身を乗り出そうとするが、もう伸び上がってしまって玉のようでない体では、

割れた皿の隙間から抜け出すのは容易くない。それを励ます洞窟の設計者の声も次第に嗄れて鳥の焦りを招いた。それはもう鳥でなくなっていて、洞窟の設計者の声も洞窟の設計者の声でなくなっていて。

割れた肌色の大皿の隙間に蹲る鳥は別に居た。それは裏を向ければ洞窟の設計者でもあって、その両方で一つであるものが、先程からずっと両方の声を使い分けていた。そう知れるとそれも、鳥でも洞窟の設計者でもなくなって、一体の散々使い古されて五体満足であるのが奇異な程に汚れた木偶でしかない。そいつが大皿を割ったに違いない。何故なら、皿は未だ完全には割れておらず木偶がその割れ目の一番奥に嵌り込んで割れ目を押し広げようとしていたからだが、その木偶も力尽きようとしていて、それに抗うための声も出なくなると割れ目に粘りのない唾を弱々しく吐くだけになった。割れ目の一番奥に顔だけ覗かせてその唾を受けなければならないのが鳥で、その唾塗れの顔を背けると、皿は一気に二つに割れて弾け返った。転げそうになった鳥を支えたのは、蛇の姿の左腕と棒のような右腕だが、そこで必ずどちらかを選ばなければならない鳥は咄嗟に左腕を選んだ。左腕は飛び出すようにその姿のまま鳥の肩から椀げた。替わりに胎児の腕が鳥の左腕になって生え、その手が蛇の胴を強く掴む。棒のような右腕が執濃く蛇の頭に振り下ろされたが、蛇は素速く拗ってそれを避けた。見詰める鳥の目が、水盤の萎びた顔の吊り上がる目にそっくりだと気

付いた。胎児の腕など生える筈がない。その目で見直すと、その腕はさも鳥の肩から生えたようにその付け根を鳥の肩に押し付けているだけで。

蛇の姿の左腕も、それが鳥の左腕であるのは確かなようでも、もうずっと前から椀げているのに、鳥の肩に寄り付いて鳥の肩から生えるままの振りをしていたか。鳥の左肩の付け根からもう一本の胎児の腕が伸びて出て、その薄い手が鳥の顔に掛かったままの唾をゆっくり丁寧に拭った。その掌の、孕んだ狐の足の裏の饐えたような匂いに顔も歪むが、唾の拭われる方が増しだと耐えた。後ろで鈴のような水の音がするのは、掌の唾が水盤の水に浸けて洗われるらしい。その水盤が危なっかしく揺れるのが背中に感じられ、背中でそれを支えているなら鳥はじっとしていなければならない。大方唾を落とした鳥の目は、磨いた石の矢尻のように硬く尖って、見るためであるより傷付けるためのようで、「狩りには持って来いかも知れない、と思わせる積もりか。誰のための狩りか、だって？ で、どれ程時が経ったのか、尤も時の数え方など始めから知らないが」と鳥に踏み付けられて陥没した木偶の背中が声を上げた。足を退けるとその跡は足の形よりずっと大きく窪んでいて、鍋底の闇に迫られた時に踏み付けたのは足の振り仰いだ顔と同じ、鳥を冷たく拒んで責めるような色を内から滲ませた木偶の、その窪みは奥へ深く拡がりながら縮み、心臓がぴったり嵌り込みそうな形になり、木偶に心臓を差し出せと迫られているようで急いで鳥は目を背けた。

少し先の柔らかそうな肉の塊そっくりの黒い霧の狭い中で、孕んだ狐が静かに藻掻いて、罠に掛かった振りをしている。湿った音を幾つも重ねて木偶は膝立ちになり、鳥を遮ってゆっくりそちらに躄って行こうとする。水盤を背負っているかも知れない鳥も同じ歩調でなら後に続けそうだが、一歩踏み出しただけで、その霧との隔たりが霧が晴れるように見て取れて、その遠過ぎる道程を行くのは躊躇われた。それでも木偶はそちらへ躄っていて、それに連れて霧と鳥との隔たりが見る見る縮まるのも分かった。そうして霧は鳥の方に凄まじい勢いで近付いていても、鳥には歩き通せそうな距離には見えて来ない。初めからの計画のように木偶が俯せに倒れた。そこまでなら直ぐに行き着けそうで一歩踏み出すと、霧は直ぐ隣の部屋程に近付いていて、狐の鳴き声も聞けるだろうと耳を澄ませたが、微かに水の浸み落ちる音が狐との間に割り込むだけ。その音を降り注ぐ毒と恐れるかに身を躍らせる蛇の姿の左腕が、胎児の手を振り払って木偶を飛び越えようとするが、木偶は音もなく四つん這いにまで身を起こしたので、左腕はその尻から腿の辺りに絡み付くしかなく、逃れようとも木偶の下半身が柔らかく輪を描くように踊って許さない。鳥の棒のような右腕には格好の標的の筈だが、それは突き出されはしなかった。右腕は一番後ろに残って水盤を殆ど独りで支えていて、既にその限界に近いのは鳥の右肩に係る重みで知れた。決断すべきなのだ。右腕を外しても代わりに胎児の腕が水盤を支

えれば良いではないか。水盤がひっくり返されては水の上の萎びた顔も困るだろうから。

木偶が首を上げ、振り返った。唾塗れで、何かしらの凹凸は顔中に引かれた細い等高線が隈無く表してはいたが影はなく、ただ鳥を冷たく拒んで責めるような色は消えていた。等高線の深い皺のように集まるのは口に違いなく、その奥で細い舌が忙しく動いて口の中の唾を掻き寄せているのが覗く。その唾が入り組んだ渦を巻いて、鳥を脅す色を濃くしている。「狩りのための遠出だ、時をも追いながら」と聞こえた後に、僅かに腐った水の匂いのする息が吐かれて、木偶の声だと知れたが試されているのではないか、唾が渦巻く深く切れ込んだだけの口にしては舌が滑らか過ぎないか。言ったのは、まさか鳥の口か。「ずっと狩りを続けて果てはない。果てがないと定まってしまえば遠出も何もない。何処をどう行こうと果て知れずに変わりないなら、行くも戻るも同じ、時は幾らでも湧いて出る。そこを立ち退いて狩りから身を引こうにも何処も彼処も狩りへと通じるばかりで、眠るも覚めるも変わりはない。時さえも狩りによってしか進まず」と言う後には腐った水の匂いの息は続かなかった。「粋がるな。戻る所も決まっていなくて狩りなど続けられるか。戻る所も忘れたなら幾ら先へ進もうと堂々巡りで、悪寒に震える背中を撫でさする手と同じだ。果てがないようなら、時の泉の手前の何処かに、戻るための印を見付けながら行くのが

狩りの常だ。果てのない所を引き返そうとしないのは、狩りをする振りだけで狩りを怠け、終わりのある時を拒んで飢えの眩暈に身を委ねたいのだ。その眩暈から込み上げる笑いを抱きながら、光りにも陰にも躓かない。それで、進むしかない時を逸れた積もりにもなれる」と言う声には狐の腑を干した匂いが混ざったが、それを嗅ぎ取ったのは水盤の水だったかも知れない。声を聞く間、鳥は何も見ずに水盤の縁を回り込み、水盤を挟んで木偶の尻と背に向き合っていた。鳥の棒のような右腕は鳥の肩を離れて水盤を支えた。それで水盤は地面から持ち上がっていた。しかし張られた水は偏って先行きが知れず辛そうにぐるぐる回っている。萎びた顔は知らぬ間に居なくなっていたが何処にでも隠れられる。

　水から昇る微かな冷気が首筋を舐めると顔だけ僅かに熱い。鳥は水盤の上に身を乗り出し、顔を水に寄せて腋にまで冷気が回り込んでも、顔だけ熱を帯びるままでは顔はずっと水に惹き付けられ、硬く尖った両目は水盤の底を睨み付けるしかない。その目を射ようと磨かれた矢尻が水盤の底から浮き上がるのは、その目の映るのと見えたが、二つ並んだ矢尻は、目に飛び込む寸前で気紛れな魚のように左右に逸れた。水盤の底に小さな孔を塞いだ痕が二つ並んで暫く鈍く輝いて消えようとする。それこそ鳥の目の映るものなら、鳥の目も消えようとしているか。直に触れて確かめようにも両腕をなくしている。胎児の手が代

わりに撫でてくれるだろうか。そうするまでもなく、鳥の顔はお面を外すように剥がれて、それだけで水の上に真っ直ぐ立った。鳥の薄っぺらな上体は自ずと捻れ、その肉厚の顔を避けるような守るような、敬うような恐れるような、慈しむような怪しげに様子を窺うような姿勢を取ろうとする。しかし水盤の上にその顔と上体を見て取っている目は何処なのか。何処にどう目線が振り向けられても、鳥の目は曖昧な陰の中に溶けて漂うようで、何処にあろうとどうでも良くなるしかない。諦めてはいないのだが、ただ当てもなく諦めていないだけではそれも曖昧で。

　脹らんだ黒い霧の端が、水盤の縁を音を立てて撫で、孕んだ狐が水盤の底に目を凝らし、小さな孔を塞いだ痕を見付けた。狐に見詰められると、その痕は瘡蓋のように脹らんで捲れ、奥に鳥の目を覗かせた。それを見て取ったのは萎びた顔の目で、狐は水の中でふやける瘡蓋に目を奪われている。萎びた顔はその耳の後ろを胎児の両手が持って水の上に翳されていた。瘡蓋が二つ剥がれて水の中を回り出し、狐は水盤の縁に黒っぽい灰の混ざった涎を垂らす。縁から怖ず怖ずと涎は水に入り瘡蓋の後を付け回した。すっかり剥き出しの孔の中の鳥の両目は、飛び出さんばかりに涎の中の灰の欠片を狙った。鳥の顔を剥がした痕の剥き出しの肉に、胎児の手によって萎びた顔が押し付けられ、その顔がゆっくりと鳥の顔になると、鳥の目は水盤の底を走る煌めきに掻き消された。

顔を取り戻した鳥は、軽々と足を高く回して狐の後頭部を蹴った。狐は侮るように笑って霧の奥に逃げ込む。黒い霧も続こうとしたが水盤が許さない。鳥の棒のような右腕と共に霧は水盤を支えて、なくてはならない。鳥は霧に躍り込んで狐を追う。

　霧は殆ど薄い壁で、水盤を飛び越えた鳥はその霧を通り過ぎ、四つん這いの木偶の踊る尻に着地しようとした足を滑らせていた。ひっくり返るしかないのに、腋を胎児の両腕が支えて、木偶の真後ろのその背中を見下ろす位置に鳥はそっと立たされた。その背中の窪みに窮屈そうに埋まっているものは鳥の心臓にそっくりで、そこへ胎児の両腕が差し入れられ、半分剥き出しになるまでそれを引き上げた。確かに心臓の形はしていて強く拍ち続く衝撃も伝わったが、鳥の胴回りより大きい。しかしその大きさだけがそれが鳥のものである証しに違いなく、知らず鳥は、それに激しく唾を吐き付けていた。木偶の股の間に隠れていた蛇の姿の鳥の左腕が頭を擡げ、捩れて、その垂れて来る唾を擦り取ろうとする。心臓は段々と肥えて支え切れずに木偶は押し潰されそうだ。木偶はもう尻を振る余裕もなく、蛇の姿の左腕は易々とその尻の割れ目を擦り抜けて、好き勝手に心臓に巻き付いた。唾が涸れて鳥は、黒い霧にすっかり取り囲まれたのに気付き、振り返っても水盤の影さえ見付からない。表面は黒い石を磨いたような艶を出し、もうそれは霧でないかも知れない。艶の中にゆっくり立ち

上がる木偶の曇った姿が映った。その木偶の背中は踏み付けた鳥の足の形に陥没しているだけで、心臓は消えていた。心臓は左胸を僅かずつ緑色に染めて行くように粘っこく、しかし乾いた音を立てて、鳥の中に埋まって来ていた。

　風が生肉を囓るような音に引き寄せられると、それは木偶が人の形と見えなくなる程に頽れたのだった。鳥はそれに伸し掛かって行った。蛇の姿の左腕が素速く退くのが見えた。鳥は、心臓から木偶の上に落ちて行った。木偶の折れて突き出された片膝が、鳥の胸に突き刺さり心臓を掴み取ったかも知れない。しかし胎児の片手がその辺りを探るとそうではなく、木偶の片手が鳥の左胸を撫でているだけで、胎児と木偶の手が触れ合って直ぐに絡み合い、その上に押し被さる鳥の体の重みを嫌がって、そこから抜け出そうとする動きを始めた。鳥は体を起こそうにも頭が重過ぎて胎児の腕の助けを待つしかない。胎児のもう片方の手が差し込まれると木偶の片方の手も出て、これも絡み合ってしまい、望みは失せた。二つの絡み合いは結び付いて一つになったが、より密に絡み合うのか、その大きさは一つの手と変わらなく感じる。それが鳥の左胸の肋を押し破って鳥の心臓がなければならない所に居着いた。鳥の心臓はそれより先に姿を眩ましていた。鳥の体の下で乱雑に折り畳まれたかの木偶の体が、低く重い音で大きく脈を拍ち出した。鳥の方が余程命のない木偶ではないか。体が冷たくなって行くのも、木偶からの温もりが伝わるので分かった。

黒い艶を押し広げて、同じ黒い艶の三体の狐の凍った屍の影が右脚を揃えて現われ、その内のどれが孕んだ狐か当てられたら鳥は助けて貰えるらしかった。それで真ん中を選んだが、三体共立派な角を股に生やしていて牡ではないか。三枚の影は鳥を見捨てて黒い艶の奥に消えないように翻筋斗打って、痛みが来れと形を整えようとし、何とかそれが消えないように翻筋斗打って、痛みが来ればと残像に鮮やかさが取り戻せそうだが来ない。その僅かな残像が鳥の姿へば残像に鮮やかさが取り戻せそうだが来ない。宙を引っ掻くように何の手応えも掴めず、残像などもう消えているに違いない。いや翻筋斗打ってもおらず、影の消えた辺りの黒い艶を見詰めてだけ鳥はそこに居られた。そうして見据えられた艶は静かに少し脹れて、玉を呑むようにグルリと奥に窪んで鳥を招いた。目からそこに入って行かなければならなかったが、鳥の目は水盤の底を走る煌めきに掻き消されてから行方知れずか。口の中に唾を溜めるだけ溜め込んで、それを一気に黒い艶の窪みに吐き付けると、それが目に代われたか確かめる術はないが、艶の窪みは更にグルリと鳥のために大きく拡がって鳥を迎えた。

その中で鳥は、玉のようにぐりぐり回る、その心地良さに痺れるばかりの孕んだ牝でなければならなかった。知らぬ間に鳥の顔の裏側からでも剥がれたらしい萎びた顔が、上からその鳥の様を覗き込んでいる。その直ぐ後ろで鳥の顔が鳥を覗き込んでいるが、その鳥の顔を着けているのは少し首を傾げる木偶だった。「これが狩りの獲物か、それはもう狩られたのか、それとも狙いを定め

られているだけか。それにしては怯えても竦むでもなく逃げるでもなく」と言う声の狐の腑を干した匂いが、鳥の柔らかい体に霧のように降り懸かって、胎児鳥の姿を粗方溶かした。残るのは、何になるのか未だ知れない孕まれていた胎児で、「いやまたぞろ罠だ。気を付けないとこっちが狩られるぞ。獲物が獲れないならこっちが獲物になって喰われるも良し。ああ可笑しい、何も残らない位に」と別の声は、腐った水の匂いがした。それもまた霧のように降り懸かって胎児を包む膜に斑模様を着けた。その奥の胎児の肉の中にもう狐の腑を干した匂いは浸みて、その憤るように激しく流れる血だけがその匂いを拒んだ。黒い艶の窪みの一番奥に溜まった唾は鳥の目になって、ぬらりとその血を羨んだ。或いはその血を吸って、それで得た力で艶を押し破りたいか。

　鳥の目は胎児の口が腐った水の匂いを吐くのを聞き取った。それがその目としての全てで、もう屍となった目は直ぐに腐って狐の腑を干した匂いを放ち、その匂いは黒い艶に溶け出しながら脹れ、遂には奔流となってその行き止まりで湖のように渦を巻く。それは、その渦が渦を見ているに違いなかった。その渦が指し示す湖の底を走る曲がり拗った溝へと、胎児は己の腹の中の児を産み落とそうと狙いを定めるが、当面それは叶わぬ望みでしかなさそうで、それならと胎児は腹の中の児を腹から目へと移し、胎児の目の中でクルクル回る小さな胎児は、溢れる涙に溺れそうでも守られて、ずっと小さいままで居られそう

だ。いやそうだとしても、その胎児とそれを目に入れる胎児は二つ共、湖の底の溝の奥に挟まって身動き取れない丸々と太った胎児が産み落としたのであり、産まれ落ちたのならもう胎児ではない。その産み落とすのを見ていたのが萎びた顔の目なのだが、その丸々太った胎児しかそこに居なかったとなれば、その萎びた顔は胎児の顔であるしかないか。しかしその胎児の顔は剥がされていて、萎びた顔は相変わらず艶の窪みの中の鳥を見下ろし。

　鳥はそのようにして、自らを渦と見る渦として見下ろされている。渦の中心に胎児に似た己の心臓を宿し、吐き掛けたものを呑み、呑み掛けたものを吐くのを繰り返すばかりでは、鳥である事に何の甲斐があろう。そう気付けば鳥は、呑み掛けたものを全て吐き、飢えた川魚のように音もなく溝の底を這って、獲物である丸々と太った胎児の後ろに回っている。それで良いのかと自問を繰り返す渦だった。吐いたものが次第に渦の中に巻き込まれて来る。心臓は止まっていたが死んだ訳ではなく、息を吹き掛ければ何時でもまた動くに違いない。胎児を一息に呑む刹那、それは産まれ出てしまって、胎児でなくなった。更に直ぐに、その産まれ出たものの抜け殻になって鳥の口に入り、鳥の喉に閊えた。抜け出たのはとても蛇には見えない程丸々と太った蛇で、一瞬飛ぶようにして水盤に張られた水に落ち、白い腹を見せては隠し螺旋を描く、泳ぐような溺れるようなぎこちない動きを続けながら、蛇らしい形を身に着けて行く。その水

盤は鳥の腕や霧に危うく支えられるのではなく、大きな立方体の石の上面の深く刳り抜かれた中に嵌め込まれて微動だにせず。

　抜け殻の喉に閊えたまま、鳥は己の吐き出したものに纏わり付かれて、ずるずると水盤になっていてずり落ちて行くがどうにもならない。少しずつ回転する石の側面は鏡になっていて鳥の姿を順に映したが、その四面それぞれに映るものは互いに似ても似つかず、その内の三つは殆ど皮膚と腑とが裏返っているようで目を背けるしかないのに、残る一つに鳥は見惚れるばかりで、それは月明かりだけが差す空っぽの寝所のような姿だった。或いはそれは始め己の姿でないとも疑われたが、その姿を映す石の側面と向き合う時だけ、鳥は自らの動きを、その月明かりに照らされる様そっくりにぴたりと止められたので、疑いも段々と晴れ、逆にその姿だけが己の姿で、余りに醜い他の三つは、吐いたものの塊が鳥の姿を真似ようと藻掻くだけにも見えても来て。

　そして石は止まり、見惚れる姿を映す面が鳥の正面に来ていた。するとその空の寝所に他の醜い三つの姿が潜り込んで、またずるずると滑り落ちるのを鳥はどうにも出来ない。その三つも月明かりに照らされ、くっきり輪郭を見せると、今度はそれらから目を逸らせなくなった。それらは三体の狐の屍の流した牡の胎児の姿で、狐の腑を干した匂いの息を萎びた顔から盛んに吐いている。しかしそれらが雁首揃えて空の寝所の隅に並ぶと、どう見ても産まれ落ちたま

まのまだ全身を透き通らせて胎内で覚えていた歌を復唱してその温もりを身に纏おうとする鳥に見える。遂に鳥は落ちる所まで落ちて、その姿を映す石の側面に触れた。石は石とも思えない程軽々と、伸し掛かるように鳥の方に傾いて来た。

するとと水盤は石に嵌まってはいない。風に弄ばれるかに揺れ、零れた水は水盤と同じ形に刳り抜かれた石の窪みの底へ落ちる。しかしその底を占めるのは、水そっくりに姿を変えた柔らかい一匹の蛇の塊で、それが水の振りをして水盤に調子を合わせて揺れるので、そこへ降り懸かる水は撥ね除けられるしかない。尖って泡立つ水は水盤との隙間の奥に覗く石の割れ目から石の中へと染み、その染みて行く水の形を浮かび上がらせ、石の中が水よりも更に透けていると鳥に知らせたが、鳥はそれを分かってもまだ石の表面に映る己の姿、それも出来るだけ真新しい透き通った姿を探してしまう。水が拡がる程、石の中は濁った。見計らったように窪んだ底を食い破り蛇の塊が石の中に躍り込んで、その塊のままの姿で、数え切れない水の卵を火のように噴き上げた。直ぐに次々にそれらは孵って石の中で無数の水が弾け、石の中を罅割れだらけにしたが、その罅の一面一面が細かな鏡になって、蛇の塊の奥の方に潜む爛れたようなその眼の輝きに照らされた、小さな鳥の胎児の生えてもいない翼を羽ばたかせる動きに似せる産まれたばかりの産まれた事にただ驚くばかりに蠢くしかない水の様を

映し出し。

　それらが誘っている、と感じても、それに酷く魅せられるだけで身を委ねられないのも直ぐに分かって、鳥は執濃く纏わり付くものを振り払うように問える喉を振り絞った。痰に塗れて出て来たのは、黒い艶を挑み掛かるように放つ蜷局を巻く鳥の右腕で、鳥は、己が孕んだ牝なのだと思い至るしかなく苛立った。鳥を孕ませたのが右腕であるからに違いない。右腕は黒光りする蛇になって狡そうに這い回り、鳥の腹に狙いを定め脅すような鋭い音を続けざまに立てた。軽く踏み付けさえすればその音を二度と聞かずに済むに決まっているが、鳥はそうはしない。潰れた蛇の腹から噴き出す黒光りする粘液の方が余程厄介だからか。蛇は鳥の腹の胎児の匂いにすっかり取り憑かれ、周りへの警戒をまるで怠っているなら、直に飢えた狐の餌食だ。いや鳥の右腕がそんなヘマをする筈もなく、鳥の股の間に擦り寄って来て。

　それを冷たく見下せば、鳥は孕んではおらず牝でもなく、傾いて来る立方体の石を素速く避け、撓る右腕で石の側面を二度三度と打ち据えてその傾きを立て直した。しかし後が続かない。石はまた危うげに水盤をぐらつかせ、それを押さえ止める胎児の逞しい腕は、力瘤の中にその胎児を宿すのではないか。しかしそんな腕なら胎児の腕ではない。何の腕か分からなくて胎児の腕に見えていただけだが、今やっと分かった。それは、水盤の後ろに隠れてずっと鳥を欺

き続けた、鳥が幾ら追っても幻のように追い切れなかった狩りの獲物であり、或いは鳥が自ら喰われるために追って来た鳥を獲物として狩るものであり、水盤はその古来からの同伴者に違いなく。

そう分かっても、逃れて行く幻とどれ程の違いもない。そのせいか無闇に血が沸き返る。その血が捩巻かれるように上り、喉の奥で渦になり、その中心が孔になり、それが更に上って鳥の新しい両目へと生まれ出て、歓喜の声でも叫びそうなその目は余りに透き通り過ぎて、そこに血を送る胎児に似た形の心臓は正に目障りで、目の力で今にも邪魔な心臓は肛門から放り出されそうで、それで鳥は目と心臓と肛門だけになり、口も喉も腑も失われたかも知れない。耳だけは目と心臓の争いから離れ、軽い羽と見紛うばかりに浮かぶようだが、その後ろの闇が透ける程に薄い二枚の耳朶でしかなく、その裏側には萎びた小さな顔が貼り付いている。右左どちらかが産まれる前の鳥の顔、どちらかが死んだ後の鳥の顔だが区別は付かない。耳朶の集める音は、その裏側の萎びた口の囁く声になる。蛇の姿の右腕が聴き分けたようだ。それで生前と死後の顔の区別を見て取り、居たたまれずにか右腕はボトリと落ちて黒光りする粘液の塊になって、石の下に逃げ込もうとしては跳ね返されるばかりで、鳥の目には心臓よりもっと邪魔だが。

鳥は心臓と肛門を代わる代わる震わせて鳴いた。石の中の罅割れが奮い立つ

ように一斉に石の表面を襲って、罅だらけの石の側面から産まれたばかりの水が浸み出る。それに鳥が目を擦り付けた。擦れば擦る程、目は渇いた喉のように水を激しく吸い回った。石の中の蛇も際限なく水の卵を生める訳はなく、水が涸れると鳥の目は罅を押し破って石の中に割り込んだ。心臓と肛門は石に拒まれたので、目は石の中の蛇を見付けてもそれより奥へ進めない。水の卵を産み終えた蛇は、水そっくりの塊ではなく蛇の姿をしていた。その目も、鳥そっくりに透き通り過ぎていて、互いにただ目と目であったなら一つに溶け合おうかという構えだが、その間に、流れた鳥の胎児の形の小さな水の屍が幾つも重なり合って割って入った。鳥の目はそれらもまた吸い尽くしたかったが、全く何も出来ず、それらによって石から押し出されそうになるのを堪えるのがやっとで、ただどうやら、それらをゆっくりと蛇が順々に呑んでいるらしく、そうして這い回る蛇の黒い影が蠢いて段々と鳥に迫っているのがぼんやり見える。しかしそれは何時まででも同じ大きさでぼんやりしたままで、鳥は何よりも眠気と戦わなければならない。蛇の影など見失い。

　鳥は雷で目覚めた。或いは、目を覚ますために目の中に雷の音を巧く鳴らせた。目を覚ますための何時もの遣り方で、しくじった事はない。そう思い至った勢いで翼を得た気になれて羽ばたく振りをすると、蛇が呑み切れなかった水の屍が鳥の目の中に極彩色を放って雪崩れ込んだ。洞窟がそっくり揺れたか。

吃驚した蛇が呑んだ水の屍を吐いたに違いない。それらも鳥の目の中に落ちて来て一塊に纏まり、鳥の目にはそれは甘い桃の姿に見え、またそれ目掛けて空腹を抱え一心に駆ける孕んだ狐の姿もその奥に重なった。しかし狐は鳥の方へでなく、何処まで行っても鳥に近付けない方へ駆けて行くようで、遠ざかりもしないが鳥の声の届きそうにないままで、狐は鳥の目の中とは別の桃を追っているか。或いは、狐の追っている獲物が鳥の目に映って桃そっくりに匂い立ち。

その桃の姿が鳥の心臓にコトリと音を立てて重なれば、その影は肛門に差し、肛門は胎児の姿を纏い、早速そちらへ蛇の影が回り込もうとする。狐が遠ざかり始め、桃は更にその向こうへ追い遣られて行く。何をなのか知れなくても鳥もまた何かを追うよう駆り立てられる。鳥の目の底で鳥の声で鳴くのは、殆ど透き通った大き過ぎる目を盛んに震わせる鳥の胎児の姿を纏った白い蛇で、その蛇の目で見返ると、鳥の肛門は黒い蛇の影に呑まれ、その腹の中に窄んだり膨れたりする胎児の姿が透けて覗けた。桃の姿の鳥の心臓は血を濃い蜜に変えて滲ませ、心臓は捕らわれた獲物のようにその蜜に塗り込められた。鳥の目はその底から突き上がる鳴き声に揺さぶられる度に水気を失い、表面から罅割れて剥がれ、その行く先は各それのみが見届けて闇に消えるようだが、闇ではなく闇に代わって鳥の目に映るのは、散らばる尖った石の欠片を洗って砕ける、か細いが途切れる気配もない水音ではないか。恃むに足る石、洞窟の中にただ

一つその位置の定まるもの、その立方体は砕けてしまったのだ。それならと目の剥片はどれも一散にその水音を目指し、その連なりの先に水音を越える拡がりを見出そうと、翼を欲しそうに微かに反り上がるのは、鳥が追い付いて来るのを待ち焦がれるようでもあり。

　目の底で鳴き声が已んだのは、恐らくそこがもう目でなくなったからで、それなら鳥の目はもうその剥片を連ねる動きの何処かにしかない。見下ろせば、蜜に塞がれて押し潰されたかに形を失った心臓は、或いはそれは蜜がそう見せるだけかも知れないが、それでも何かを孕むかに微かに膨れる兆しを艶めかせ、その艶めきが激しく鳥の目に迫って剥片の連なりの勢いを挫くと、砕かれた鳥の目は砕かれて尚遠くを見通せたかして、剥片の端々に鳥の声に身を褰し塵のように縮んで潜んでいた無数の白い蛇の分身共を振り落としたので、その辺り一面が濁り、洞窟そのものの見てはいけないような裸の姿がそこに僅かでも浮き彫りにされて白く光った。そのほんの小さな形から洞窟全体を甦らせられる訳もないが、ただその形だけを見詰めながら、それとは全く離れた遠い方を見通すなら、鳥は鳥の心臓が孕もうとするものの形を、その何処とも別の、洞窟などあり得ないひたすら低く平べったい何処かに丸ごと映し出せたに違いなく、鳥はその鈍い息遣いまで聞き取って、鳥を狩るためのその爪と牙と飢えて鳴る喉と胃袋とをそこに見据えたが、それは自らの姿とも見紛われた。怪しみなが

らもそれと息を合わせるまでに親しめて、それが心臓に宿る時を快く待ち望んで飽きないのもまた怪しく。

それはしかし知らず鳥は、その鳥を喰らう獣を逆にいたぶり弄ぶようにして狩っていたのでなければ何か。何かを台無しにしたかも知れない不安は不安としてその狩りの獲物を呑み下すしかない鳥は、それで直ぐに己の血が入れ替わるのを感じ、鮮度を保つのに血は絶えず水盤へ新しく流され続けるべきだし、水盤はその血を受けてだけ洞窟の光りに太刀打ち出来る影を刻んで、鳥の目にも映るのではないか。蜜に塞がれたままの全ての血を押し込めている心臓を破るには、石の欠片を刃の形に磨くしかない。石は水の下に幾らでも拾えたが、どれも余りに歪なまま鋭過ぎてそれより磨きようがなく、歪なままでは、剥き出しの肉なら裂けても蜜の奥へは切り込めず、刮げ取った蜜を不恰好に咥えた石の欠片が水に戻されるばかりで、欠けた蜜は直ぐまた心臓から滲み出て補われ、新しい蜜の黄金色は益々透き通って血の色の混じる兆しもないが、逆にその黄金色の飛び抜けた混じり気のなさが他の色の中に必ず血の色の混じっているのを暴き、蜜以外のあらゆるものに見慣れた血の流れている様を見て取っている鳥は狼狽えた。しかしそれが鳥の心臓に孕まれたものが流す見知らぬ別の血であったらとも疑われ、綺麗に無傷であるかに傷ばかりの、一切の内と外とが入れ替わりながらも気付かれずに続く、その外に居るか中に居るかもあやふやなまま、

独り鳥の形でいられるか。その裏返るばかりの答えこそ更に読み解けず、悩みの種は増すばかりでも、その悩みに縋り付いて安らえる筈もなく。

　水の中の石の欠片にこびり付いた蜜は、その色のままどれももう石より硬いが互いに擦れ合って角が削れ、鳥の胎児の形になったものから順にその肛門に小さな黒い蛇が出入りし、その腹の中で何度か蛇が眠ると、黄金色に血の色が混じった。その二色の不釣り合いが忌み嫌われてか血の色がどず黒くなると、肛門から出て来るのは混じり気なしの黄金色の蛇で、それきり肛門は塞がり、それを振り返りもせず黄金色の蛇は水を出て、どれも狐の足取りを追うらしい。硬い蜜にずっと閉ざされるかの血のどす黒さが、異なる二つの血の終わりのない争いの色ならそれで疑いは晴れ、血の争いの果てしなさこそ安らぎであって、鳥はまた洞窟の裸の形の露わにされた小さな一面とだけ向き合えたが、その表面の白く光るのは見て取れず、形もなく透けている中を覗き込むだけで。

　その中はそこだけが暗がりなのに少しも眩しくないと思うと、鳥の周りの暗がりが一斉に火に塞がれたように輝いて鳥の目を焼いて灰にした。待ち兼ねたようにその灰の中へ洞窟の裸の形は身を隠し、却って鳥は、霧が覆うその向こうのずっと先まで見通せた。そこもまた形もなく透けているだけで眩しくはないが、切れ目が一つだけあって、そこから、手繰りようもない遠過ぎる記憶のように何もない裂け目が段々と拡がって、今居る洞窟の外のもう一回り大きい

次の洞窟を垣間見せているか。それを探るかのように鳥の腹から腐った桃の匂いが放たれた。或いはそれは腐った桃そのもの、或いは桃に似た匂いを放つだけの腐った水かも知れないまま、ひたすら薄く延び拡がって何もない裂け目を塞ぎ尽くし、鳥を導いてその上を滑らせた。鳥は己が身が何処かに浸みて行く音を聞いた。しかし音が鳴るのは拒まれているからで、その音の描く楕円の縁に乗せられて、次の洞窟の新しい光りが吐く冷たい風に晒されるかに身の凍て付くようでもある。その硬い身全てを捩って鳥は蜜を裂き、己の心臓を切り拡げても尚滑るまま。

　その流れ出る血の色は血の色はと叫ぶ声の中にでもその色を見て取ろうにも、心臓は毀れ物のゴロリと投げ棄てられたように空っぽではないか。その奥を覗けば、覗く目を映しそうに磨かれてもいるが、その映るのを逃れるかの目の影が流れる方に映るのは、楔形の骨片を繋ぎ合わせて出来た不釣り合いな二つの目で、その映された己の瞳の奥を覗き込む己の視線に囚われて、片方の目ばかりが熱く焼け、それで溶けた骨で透けた球になり、もう片方は骨片の擦れ合う音だけになった。音の目は、暗がりでも透き通った水を正確に掬い取るように、真っ白い地面の角張った形を先へ先へと途切れさせない。音が掠れて消え掛かり目は形ばかりの中に迷って光りを失っても、却って光りが失せれば、音は掠れるまま真っ白い地面の冷たさに沿って細く流れて行けて、その冷たさの縁に

至り着いた。そこは針の先のような行き止まりで、小さな二つの孔を塞いだ痕に挟まれて、孕んだ狐がぐったりと横たわっている。それを見付けたのは焼けた骨の溶けた球の目の方に違いない。しかしそれは狐の目ではないのか、隻眼の。その失われた目は、産まれて直ぐ鳥に啄まれ、その嘴の一撃が残した天も地も轟かす血の焼ける匂いに狐は昏倒したのだった。それから舌の縁で乾いたその血の苦さに目覚めるまでの時は、片目と共に彼方に持ち去られ、その取り返しようのない間を埋めなければならないなら、果て知れず長い波長の波のようなう退屈な恨みしか見当たらず。

　それで狐は、鳥を狩るための囮に蛇を孕むので腹は脹らまない。しかし鳥は裂けた空っぽの心臓の姿をしてその囮を見破り、戻って来た腐った桃の匂いで身を満たす。それが鳥の胎児の姿になって新しい洞窟を指差すと、黄金色の幼い狐が約束の時をただ独り違えたかのようにその中に居て、鳥を恐れる大きな両目を見開いて他を寄せ付けずに震えているのなら鳥は飛び掛かれば済む。しかしその途端、狐の孕む蛇に惑わされ、それが囮であるのを忘れ嘴がそちらを向いてしまうだろうとも感じられれば動けない。そこへ半身水に浸かった隻眼の狐が死んだように流れ寄り、脹らんでいない腹を自ら裂いて何も孕んでいないのを見せ、黄金色の小さな蛇が水の中で狐の足に何匹も絡まって、開いた狐の腹の空っぽの奥の裏側に、蛇の胎児が孕まれているのを知らせているなら、

　鳥は何も拒めずただ襲い掛かるしかない。新しい洞窟へ。

しかし飛び掛って行くのは狐の肛門から放り出された水の形の蛇ばかりで、見る間に蜷局を巻く水で溢れた洞窟も、それら蛇の群れに合わせて産まれたばかりのように産声を震わせのたくった。それを聞くに堪えないと身構えて胎児の形に身を固める鳥は、産声など洞窟が上げる筈はないと疑う程、己が身が硬い石になろうとしているらしくても、それに連れて更に身を縮めて蛇の胎内へ収まって行くようなら洞窟の中の鳥であった今までの事は全て取るに足らない。それにそこはもう洞窟ではなかった。洞窟と見紛われもしそうな窪みや穴でさえなくグリグリと脹れて盛り上がるばかりの肉でもあり水でもある一繋がりの塊で、もう鳥の感覚などすっかり忘れた殆ど石である鳥は、砂粒のように掻き消されそうでありながら、また鳥はそれを望むようでもあったが、蛇の胎内にすれば鳥が石に近付くだけ、より不快な痛みは長引いて、それを何とか外へ出したかった。それに気付けば、鳥はまた石から鳥へ戻る方向を探ろうと身を捩るのだが、その途端、蜷局を巻く水が束になり黒ずむ程に密集して抗った。鳥に戻れず石になれず、その合いの子でもないとなれば、水の形の蛇になって蛇の胎内に居着く他ないが、それが許されるなら疾っくに蜷局を巻いている。恃めるのが桃の腐った匂いだけでは己を捨てるのも儘ならず、その匂いが何処かで満ちて溢れるのを待つしかない。いや待つ事など何もない。待てる訳でもない。

ただ何ものにもならず、元々何ものでもなかったのであれば済む。そうして済んだ後に、それは何処へも抜け出せないまま、蛇の胎内ごと冷たく乾いた広々とした水盤へ落ちた。その底の鈍く輝く小さな孔を塞いだ二つの痕に射竦められれば、鳥は鳥であり石は石であるしかなく黄金色一色だった。子狐の途絶え途絶えの高笑いが狩りの決着か。

　確かに子狐の目は輝き勝ち誇っていたが、黄金色の蜜に喉を詰まらせて息絶えたその屍は蜜に埋まって腐りもせず固まっている。屍が笑うのなら止めようはなく、石はそれを喜んで鳥を置き去りにしてその笑う方へ身を拡げた。笑いは已み、拡がった石の表面から萎びた青白い蛇の小さな顔が一斉に湧き出せば、そこが石の身ではなく影であるのを暴いて、それを鳥が笑おうとするが渇いた喉から絞り出されるのは、水の屍の擦れ合う骨のように乾いた音ばかり。音は楽しそうに水盤の底をクルクル回り、それを追う萎びた蛇の顔から段々と肉が剥げ白い骨を覗かせるのが鳥にはまた可笑しかったが、もうそれを声にはしなくて良いのだと微笑もうとした。それで鳥は己の口の形がただ子狐の目を刳り抜くようなためにしかなく、決して笑いとは係われないのだと分かり、帰るべき所に辿り着けているのかも知れないと周りの様子を探っても、やはり黄金色一色。いや己の姿ばかりはすっかり白い骨のようなら、黄金色を全て翼のように操れて、蛇の腹に呑み込まれた闇の塊も飛び越えられそうで、その爛爛と踊

るような鳥の目を石が笑い返した。哀れな石め、狩りを知らない。　その歪んだ鳥の嘴を経て石は鳥の腹の底へ落ちた。それでも笑いは已まず。

その石が鳥の翼に平衡を齎すに違いない。骨の翼の黄金色を纏って蛇の腹の闇を孕めば、狩りへと鳥を導く風の向きは知れたが、風は行き止まりの洞窟に籠もるかの一塊で、その中に黄金色の血を巡らす大小様々な獲物が犇めくのを鳥は見た。しかしその形を具に辿って、どれもが体の一部を欠いた血塗れの鳥の姿に見えて来てしまえば、目を背けながらもその身代わりになる己が姿を思い描く程、鳥はその通う血の心臓に蓄えられて行く熱さに身悶えられて心地良かった。その熱はしかし心臓から外に伝わるのを拒んで鳥の身を冷やし、身を竦ませた鳥は風の餌食のように風の塊に呑まれ、呑まれながら裏返って風の塊を呑んでもいて、裏返った目を掠めて洞窟の真っ白い地面そっくりの蛇の顔が行き過ぎる方へひっくり返ると、鳥は蛇の形の洞窟を孕んでいて、それがまたそれを孕みその孕まれたものがまたそれを孕んで切りがない。新しく孕まれるもの程小さいが、小さいだけより遠く奥深く鳥の腹を脹らませて行くようで、鳥はもうその腹から切り離されてしまったようで、産まれ損なって流れて干涸らびて硬くなった胎児の化石でもなければ形を留められないかに己を卑しめたが、却ってそれで噴き上がる霧の勢いに乗って、始めの洞窟よりも更に古い狩りの情景の中に身を溶かし込めた。幾つもの砕ける水の音が絡み合い、水音と

は似ても似つかぬ低過ぎて耳障りな響きを踊らせて、それが鳥に目に出来るものをどれも極僅かずつ震わせるので、鳥は縛り付けられたかに翼を横たえ身を弱らせて行くしかない。狩りはもう終わっていて、その終わりに目を凝らしている鳥の他は静けさと共に彼方に持ち去られ、静けさの形見の残照の温もりのせいで未だ足掻き続けなければならない鳥を、その情景の暗い湿った端を項垂れて行く痩せ狐の一列の群れが気付く筈もなく。

　鳥はずるずると胎内に戻って行くようで胎内ではない、狭い行き止まりでも光りが強過ぎるので。光りは黄金色に近いかも知れなくても一瞬で底無しの水の色にもなって鳥諸共流して跡形もなくせるだろうがそうはならない、静けさが取り戻されたので。いやその静けさの底が底無しであろうと必ず何処かに通じていなければならないと告げられているようなので。つまり静けさは何処かで捩れているのか、どんな轟音の大波をも翻弄出来て。それならそれは静けさなどではなく、或いは静けさは上辺の飾りで、一瞬より短い時の中を溢れ返る血腥い産声を聞き取ろうとする耳の頽れ際の小さな軋みばかりの、その消えようともしない濁った響きに籠もって音を拒む、独り一瞬の外へと通じるしかない、針穴より狭く朧気な洞窟でも見付かりそうで。（二〇〇七年十二月二十四日）

＊

＊

＊

（水だけが独り流れても…）

水だけが独り流れても、水にしか聞き取れない音を、水は聞き逃し、顧みもしない。そんな水に寄り添えてこそ、呆けた身を保てるのだと見直せば、水に見下ろされ見下ろしてもいる己の姿は常に、流れに絡む蛇で、その血と肉の疼きも何時からか虚ろなままで、「渦、渦」と呟きにも聞こえる矢印を残して消えてしまった水の音は、何処にも戻らない。薄く光るその深みの端を巡るのは矢印の影に過ぎず、その先には、切り詰められて何一つ匿えそうにない小さな

弧が、投げ出されているだけで。蛇とも水の流れとも係われない、抜け殻の弧が。それで蛇もまた己の疼きを取り逃がし、「渦、渦」と呟く途切れた夢を綯い交ぜてやっと、小さな蛇で。或いは蛇でもないか或いは、蛇の姿など迂回しろよと語り掛ける姿が蛇。しかし、何処を向いてもいない矢印などを見て、迂回など出来る筈もなく、蛇でさえないままに「渦、渦」とただそのままであれたなら、と呟く渦は、精々蛇の姿を映すのみで。或いは薄く光るのもまた、己の血と肉に違いなく。

　そうして渦の幻まで砕けたなら、薄く光る深みの縁は、何やらざわめいて淀む。嘗て身を投げた際の、水飛沫を沈めた目映い淵へと、淀みは向かい、その後を闇のように追えるなら、水との迷いも忘れられ、擡げた首の重みを怒りに換えて睨むばかりの眼差しに、己を恃めもする。とは、蛇の姿を半ばまで脱いで溺れる事でしかない、と気付かされて溺れるのが何であれ溺れるなら、それは血と肉を抱いた夢の始まりへと、蛇の姿となって切り込んだのだ。そんな断定は常に眠い。で折角の断定は切れ切れの端屑で、しかしそれを掴もうとは出来て、望まれていた筈のもう一方の弧、或いは弧の続きへと、促されるままの勢いに、何であれ砕けて熟れて混ざり込むなら、ただそれを、血と肉の眼差しと見做せ。そんな断定も眠いがどうした、と折々に繰り返し。

　眼差しは、その抜け出た痕を埋めた粘土のような血を舐めてから、その血を

薄めて洗い流した水の匂いの染み付いた、何もない真四角な隙間に行き当たり。身を投げる際の、蛇が必ず脱ぎ捨てる筈の匂いで、ならばどのようにか蛇の身を捩らせているのだが、その隙間は壁の迫るように冷めて。平たくなって幾筋か這い回るのは炎で、それは虐げられているようで、そこだけ短く地べたを照らす。それを逆向きに辿って炎の出所を探すべきだが、必ず炎の流れる方へ眼差しは引き戻された。それで蛇の身も捩じ曲げられているらしく、炎の燃え滓を次々に背負い込んでいるような、増すばかりの重みも骨身に応えた。何が邪魔をしているか段々と分かって来た気もして、「もう邪魔はしない」と自ら呟けば良さそうだが、その声が後々繰り返し邪魔になりそうでもあり。その声の向けられそうな方を振り返ると、平べったい孔の奥に、小さな蜥蜴のような炎が、一塊になって、数え切れず蠢いて。そこから外に飛び出るものは見当たらないが、ではその孔の周りは闇かと目を凝らせば、蛇の胴がぐるぐると巻き付いて煌めいて。

目を塞いだが、己の胴の煌めきは瞼の裏に愈愈留まり、蛇に孔を締め付ける力を与え続けた。目を塞いで、それで見えなくなるものなど何一つない、そんな事は分かっていたのでは。地べたを這う炎は尽き、迫る隙間は瞼を凍らせる程に冷えて、匂いも嗅ぎ取れなくなった。孔の奥の炎の光りだけで、隙間の真四角な形は照らされたが、その光りまでが冷え、炎の動きを鈍らせ、遂に炎は、

じっと孔の奥を向くただ一匹の蜥蜴の姿になった。孔もまたくっきりとその蜥蜴の形になって、蜥蜴の姿そのままに孔は塞がれた。それは蛇には、消えた孔の上に腹を乗せた大きな蜥蜴の姿だった。それでも蛇はまだ、消えた筈の孔の周りで蜷局を巻くままで、のそのそと蜥蜴がその見上げる方に這い出しても声も掛けられない。光りを失って行く隙間の中に、蛇の背負い込んだ炎の燃え滓の転げて落ちる音が、蛇の腹の底をゆっくり撫でた。そして蛇の胴が尻尾の方から延びて、吸われるように隙間に滑り落ちていると気付いたが遅かった。燃え滓の熱さは火に劣らない。蛇は尻尾から胴の真ん中辺りまでを失い、炭になった後ろ半身は炎の燃え滓と溶け合って、濁った紅の火をゆるゆると噴く蜥蜴の形に伸び上がり。

　それで蛇の前半身は、それより隙間に落ちるのを止められた。しかし隙間は、燃え滓の塊の蜥蜴を吐き出して、また蛇に迫るようで。身構えるようにそれに蛇が向き直ると、隙間は真四角なまま小さな部屋程の大きさを見せて、静かに蛇を迎えた。慌てて蛇はまた逆を向いたが暗い壁に塞がれ。或いは壁ではなく壁に見せ掛けた暗がりが或いは、いや。何も試すべきではない。身を預けてまでして確かめて、首尾良く危うい目に遭わなかったにしても、蛇を迎えようとするものとの隔たりは埋め戻せない。燃え滓を真似て螺旋のように垂直に身を反らせ、蛇は錐のように回った。その地べたを擦る熱が緩やかに昇り、小部屋

の天井を円く溶かして行く。その一番高く抉れた真ん中に白い花が一輪、下を向く小さな顔を覗かせ、真下の蛇へ雫を滴らす。雫は回る螺旋の中へと落ちて、蛇の肌には触れず、地べたの熱に直ぐに消えたが、それで紅い湿り気が満ちて蛇は噎せ、それで目が塞がれる度に閃光が瞬き、湿り気の紅だけは残して、他の色がどれも褪せた。真四角だった隙間は見上げる限り何処も角が取れ、蛇は卵の殻に閉ざされるようで。

ただ下は沈む紅色に覆われ、卵形の底は隠れて、紅の澱は少しずつ厚みを増し、真ん中から脹れて丸みを帯びた。湿り気は大方その澱に収まったか、蛇は殆ど噎せなくなり、閃光に目を遣られずに済んだ。見上げられる花だけが、ずっと同じ間合いで雫を落として来る。蛇は澱の重みで地べたから押し上げられているのを感じた。それでも体を錐のように回せるのは何故だろう、それを確かめる事になるのか、螺旋のバネを利かせて跳ね上がろうとすると、即座にそれを嫌うように花は萎んで、黒ずんだ花弁全体から、紅い水が途切れなしの筋になって落ちて来て。蛇も咄嗟に上を諦め、絞ったままの溜めた力を真下に向けて身を沈ませた。すると、その紅い澱の中では、摘まれた小さな白い花が幾つもクルクル回りながら泳いでいたが、直ぐにそれらは霞んで消えた。蛇の身は、地べたに刺さり、更に深く差し込まれ、いや或いはそれは抜け殻。血と肉の疼きは、虐げられたように平べったくなりながらも、螺旋を描くのを已めな

いまま、緩やかな弧の上を滑らなかったか。そこはもう紅い澱の底である筈もなく。
　そこは一瞬、卵形の隙間で、しかしただ一度の蛇の瞬きの閃光でその形は砕け、蛇は犬のような寝息を立てて横たわる自分より大きな蜥蜴を跨ごうとしていて、その腹の端をつるりと踏んだ。蜥蜴は夜に塞がれた小さな歪な五角形の窓を、飛び出そうな濡れた大きな目で見上げただけで、目を開けたまま寝ている。その寝息に聞き入ると、それが僅かな月の光を夜の窓から導き入れているのが、蛇の額に感じ取れた。その額から毒が回るように蛇の全身を懈さが襲い、痰を吐いたが音もしない。僅かでも音がなければ、懈さだけでは眠りには入れず、蛇には好都合だ。蜥蜴は眠ってはいなかった。変わらぬ息遣いで、笑いながら蛇の吐いた痰を啜っている。その啜る音、眠りを誘う音が聞こえてしまう。それを払い除けようと蛇は蜥蜴に「丸い卵を産んだ事はあるか、あるだろう、乱暴に摘まれて欠けた花のように歪でも」と尋ねた。返事がないので「俺はお前の産んだ卵を見た。その卵の中の真ん中で。俺達は繋がっているんだろう、蜜と花弁のように」と続けたが、最後の科白は巫山戯た調子をこっそり乗せて、そんな筈はないが、という意味まで含んだか。蜥蜴は痰を舐め尽くすと、また動かなくなった。まさかずっと眠ったままかも知れない、その変わらぬ笑顔を眺める内、蛇の額は磁石のように夜の小さな窓に寄り付き、差して来る月の光

りが、微かでも外の音を忍ばせていると思えて仕方ない。蛇が今、音のない方に身を寄せていて、何も知れないでいるのなら、月の光りの方には蛇に知り得る何かがあって、或いはそちらでも何も知り得ず何も聞き取れなかったとしても、身を以てその月の下の虚ろな道程を巡ったとすれば、それだけで、目の眩むような知識が、蛇の身を貫くに違いない。などと思う間に、蜥蜴が目を覚まし、蛇の右目の下を軽く咬んでいるとは。

その笑顔は消え、不機嫌に痰をねだっている様子で、粘り気のある舌が、蛇の頬の脹らみを執濃く舐めている。蛇が瞬くと、その閃光で蜥蜴の口は振り払えた。蜥蜴は喉の奥まで覗かせて口を開けたまま、ゆっくりと窓から逸れる方へ倒れ込む。いや寧ろそちらへ身を起こそうとしていて、蛇の方こそ、何処かへ倒れ込むのだ。その蛇の体は硬い棒のようで、もっと硬いものに当たって跳ね、跳ねた先でまた硬いものに当たって跳ね、うろうろ己の影を探す振りでもするしかなく、或いは水の影で構わないが、どんな形だったろうと思い巡らすと、代わりに赤い熱が行き来して、蛇の喉を嗄らした。喉は蜜を欲している。喉を噎せ返らせ、息も止めてしまう激しく濃い蜜を。夜の窓は迫っても月の光りは取り払われ、何か酷く長いものを呑み下してしまっている蛇だが、それが果たして月の光りかどうか。影などでなく、見上げられる花を探すべきで。白くさえない、色を失った或いは地上と別の色のその花だが、もう幾重にか、苦

い悪臭さえ放つ穢い色を纏った歪な五角形の毒虫共に取り巻かれ、その虫の毒が、蛇には蜜の味かも知れない、と思わせるのが頼みで。
僅かな虫の這った痕に、蛇は知らせを読み取った。「ただ与えられた二つの眼にぶら下がって、それに引き摺り回されて生きるしかない、そんな愚かさは、月明かりの気配に惹かれる度合いで測れる。月を向いている積もりのその顔は、そいつの愚かさをそっくり表して、喧しい」と。やはり月の光りを呑んでしまっていたかと諦めれば、その知らせに、あの矢印の影が差すとも見え、見えもしない渦へ身を委ねるしかないか。渦が見えないのは、それが裸だからで、そのの纏うものに己がなれば、その渦に寄り添って居られる筈だ、などと思い描くのが誤りで、矢印の影どころか虫の痕まで見失い、蛇はただ身を震わせて、何やら纏わり付く汚れを落とすばかりに追われた。その汚れは月の光りから湧く垢だろう。ただ震えるままでいなければ、蛇としても覚束ない。細かく散った垢の欠片は低い方に集まって溝を作り、蛇の息の届かない離れた所まで流れ、順に呆気なく燃えて消える。その僅かな輝きに映える水の痕のぐるりと光りを嫌って避けたような筋の、掻き消される先にしか、蛇の身の向く事はなく、そこに設えられた使い古された戸口でも開けるように、蛇は尖らせた大口をまるで力なく開けながら、頭を捻り捻り。
月明かりの垢の燃える勢いが衰えたのではなく、目が澄んで、あれやこれや

を色々に見通せているに違いない。水の痕も低い方へ追い遣られ、その分、蛇は高みに昇るようでもある。恐らく垢は湧き続けていても、蛇を脅かすものではなくなって、それよりずっと目を奪うものが行き交っている。それが益々高みを昇る気分にさせたが、呑んだままの月の光りの僅かな重みが喉の奥に込み上げただけで、逆に身は沈み込んでいて、今やどうしようもなく、次々に見通して来たものの、その奥へ奥へと、蛇は埋もれて行く様ではないか。そのし掛かって来る方を振り返ると、積み上がった色々な形が一斉に溢れたが、それらはその一塊のまま、大きな蜥蜴の目玉に違いなく、それがゴロリと蛇の目の中を占めた。全て蜥蜴が見ていたのだ。突き上がるように開かれた蛇の口が回り込んで、その蜥蜴の目玉を端から噛み砕き。それが蛇の腹に収まっていないのは確かだが、側でそれらを呑み下す喉のゴクゴクいう音は聞こえる。蜥蜴の目玉を全て食い尽くしたら、喉を鳴らす奴の正体も見て取れそうだが。しかし蜥蜴の目は、食われても食われても脂のように脹れているようで。或いは、それに圧し潰されそうな蛇の目を通して見ているので、そうとしか見えないか。いや蛇の目こそ、真っ先にその喉に呑まれていて。

引き延ばされ、曲がって硬くなった蛇の片目は、水の痕をなぞったようだ。やはり光りを嫌って、曲がる内側の方を隠して斜めに捩れる。もう片方の目は点のように縮んで、そこから僅かに涙の匂いがしなければ、目とは分からない。

それでもその二つの目が、ものに焦点を合わせるには何の障りもなく、それは先ず、矢印の形に強ばった己の体に向けられ、その矢印が少し溶けて、一度に色々な方を指し示そうと蠢く虫のような姿になると、自ずと目は、その奥の、水に沈んだように仰向けに丸い腹を出す蜥蜴に向いた。腹は、大きく笑う口のように裂けていて、中のものが湧き立つように覗いた。他のものの陰に隠れるものは一つもなく、その一つ一つの裏から表から一切が、露わに剥き出され、果てなく続く勢いで。そうであるからには、その拡がりは、蜥蜴の腹を出て、遥かその奥まで延びて行かねばならないが、そうは見えて来ない。そこに隠れなく見えるものの全てが、蜥蜴の狭い体の中に詰まったままとは。その謎を蜥蜴に尋ねたいものだが、腹の他には、蜥蜴の脹れた喉が仰け反って、息をしようとひたすら波打つだけでは、どう声を掛けるべきか。

試しに蛇は「腹を出ないまま、腹の中で交わって、そこでまた、その同じ事を繰り返すものを産み続けるなら、腹はそれらを幾らでも受け入れるままで腹を痛める事もなさそうだが」と独り言のように呟いてみた。早速蜥蜴は、蛇の両目を掠めて、已むに已まれぬように仰向けの体を大きくグルリと起こし。腹の中のものが、一斉に零れ出て見えない方へ滔滔と流れ落ち。と見えるのは、濁った様々な色を着けた霧のような渦ばかりで、身のあるものは何もない。裏返ってしまった腹の中は覗けず、確かめようはないが、蜥蜴の体はぴくりとも動

かず息遣いも絶えているなら、その霧の渦も見掛け倒しで。実際、蜥蜴の平べったい体が間近まで塞ぎ掛かって、何とか見据えられるのは蜥蜴の額のみ。ただその斑模様は、後頭部の方へ向かうに連れ、窄まって行く梯子の形を描き出し、それは、何処からか蜥蜴の赤らんだ肌を離れて浮かび、より高い方を蛇に見せた。何が見えるのでもなく。

　蛇は、そんな何が見えるのでもないものを、ずっと見ようとして来たのではなかったか。何が見えるのでもない方との間に何も遮るものがなければ、そこからこちらの己がどう見えるかを、曇りもなく歪みもせず、そちらへと映し出せようし。そしてその己の姿を梃子にして、そちらに向かう事も出来ようし、そちらで始まろうとする事柄に加わるべく呼び出されたものとして、涼しい顔で振る舞うのも、満更ではないし。しかし蛇の姿は、蠢く虫だった、一度に色々な方を指し示す事に係り切りで居るしかない。始まろうとする事柄の、始まるまでもない終わりが、いきなり蛇を押さえ込んで来て。その、己の屍を埋める土と同じ程の重さに敷かれながらも、蛇は、呼び出すものの方へと己が回って行かなければ、ここは生き抜けないのだと決め付けて、腹を固めた。腹を固めたのなど直ぐに忘れられるしかないが、己の屍に被さる土の重みばかりは体が覚え込んで、それを頼りに蛇は、己の墓、と言っても土を盛っただけの、その形や影やそれが風に吹き曝されて消えて行く様、後から来たもの達に踏み躙

られて行く様などに思いを馳せもして、何かの音に振り返って漸く、蠢く虫の姿の、同じ所をグルグル回って描かれた円の中に、その己が閉ざされているのを見て取った。しかし独りではなさそうだが、独りどころか。

騒々しい。それは偏に、そこに一本の柱が立てられているのだが、その位置が、閉じた円の中心を明らかに外れているせいで。外れたと言ってもほんの僅かで、僅かである程、蛇の体に痛みとなって、ぐらぐらと宙ぶらりんに刺さった。最前蛇を振り返らせたのは、その痛みの音に違いなく、蛇に、虫のようである姿を耐え難くさせ、それが蛇を酷く独り切りにした。そのそっくり同じ影を引く身代わりを待つしかない、待てないなら探すしかない、探せないなら造るしかない、造れなくとも造るしかない。蛇に何が造れるか、虫そっくりの蠢く姿のもう一つの己、或いは、己を補ってそれと共に一つであるもの。すらりと窮まる答えは、己の屍で。がそれは諸々のあらゆる問いの行き着く答えでもあって、闇雲にでも求めさえすれば、自ずと返って来るもので。そうではなく、そのような答えも打ち砕く力、更に、他のどのような答えをも打ち砕く力が、虫の姿の芯にまで届けられなければ。それが求められている身代わりで。改めて蛇は、己が独り切りかどうか、周りを見回し思案したが、それで何が見えるのでもなく。

虫の姿は、蛇から失せていた。蜥蜴の胃液かも知れない水の匂いを籠めた狭

い風に吹き消されていないなら、その姿の骸は、塵となって側で回っているらしい。なるほど目を凝らせば、塵は纏まって虫の形に成りたがっているようで、蛇は、その屍かも知れない己を見るのは已めた。ぼんやりとでも動く塵の形さえ追えば、その影の動きから、己の身振りを確かめるかのように、その形を、元の蛇としての姿に受け入れられたので。そんな蛇を或いは塵を、慕って来たかのようにと、塞がれた窓が横を向いて、その一枚だけの分厚い硝子が、恥じらうように傾くと、窓の下の方に隙間が空いた。そこは直ぐにじわりと濡れて、それが外からの水の当たる力のせいだと知れて。蛇独りなら、もう隙間の縁を這って窓に絡めてもいようが、塵はどうか。いや寧ろ躊躇う蛇を置いて、吹き止まない狭い風に導かれ、塵は、蛇のように窓へ首を擡げていて、それに気圧されたか、水の勢いが失せて隙間は狭まり、塵と窓硝子は争う音を立て、それに自ずと蛇の身が踊り。

踊るその目で蛇は、窓の隙間に艶々と溜まって行く水の塊の中に、透けた翼の小さな鳥がのた打つのを見詰めていた。水に囚われた鳥。一口に呑むに恰好な、蛇のための差し出されたかの。しかし躍り掛かるより、蛇の方こそ囚われて、何ものかに己が肉を狙われていないかを恐れて蛇は、頻りと周りに心を用いた。すると潰れた鳥の形の水の染みのような汚れが、点々と足跡のように続くのが、気に障る。周りにはそれだけ。ただそれらが、急に立ち上がって膨れ

上がり、一斉に蛇に食らい付いて来るかも知れず。窓が微かにカタコトと鳴ったのは、もう隙間を抜けて窓の外に出た塵が、蛇を嗤っているに違いなくても、却って蛇は、強張った己が身を持て余し、何に向けてか、強がりなのか弱気なのかも分からずに、涎を飛ばすしかない。水の染みかも知れない鳥達が、その涎を突つきに来ても、それより何も起きそうになく。そのまま時が過ぎる程、蛇は、奥深く拡がって見えた蜥蜴の腹の中に、丸ごと呑まれてしまっているのだと思い込むばかり。涎も尽き、周りの水の染みの折り重なりが描き出す曲がった矢印が、その矢印の方向に抗って、両翼を拡げるようにも見えて来ると、漸く蛇は、窓から少しだけ身を捩り、これ以上になく静かに息を吐き。柱の位置を確かめなければ、と気負えば眠気が来て、柱など気に掛けたのが命取り。いや、重い瞼にただ抗うのが精一杯で案ずるに、命取りは柱ではなく、蜥蜴の腹の中は、位置を測られるのを嫌うのだ。違いない。にも拘わらず位置を測るために柱が立つ。そう分かったところで、位置を測りたい欲望は、蛇を捕らえて酷くなるばかりの病のよう。

　狭まる窓の隙間に押される水の塊、その中を締め出されそうな、水に囚われた鳥。押し返そうとする水の塊が、震えながらグリグリ丸みを帯びると、鳥も水から振り落とされまいと体を丸め。蛇には初め溢れそうな涙の粒にそれは見えたが、中に胎児の形が透ける乳色の小さな卵に見直されると、それを焼き付

けた目を窓全体に配って、角張った硝子の何処かに、その嘗て卵のように丸かった痕を探した。外側に当たる水は、雫となって伝う初めから細かく砕け、蛇の目から丸みを隠した。硝子の表面は、次々に弾ける星とその星雲を成してズキズキと痛そうに光る様が入り乱れ、窮屈に争うようだが、何故光るのか、何処から光りは来るのか。その光りの源を、蛇は卵形に思い描いて。すると直ぐにそれは、蛇の赤い口に一呑みにされ、卵は直ぐまた同じ所に産み出されたが、直ぐに赤い口の餌食になって繰り返される。その内に、その呑まれる刹那の卵の痛みが、蛇にもそっくり伝わる。赤い口の奥の胃は満たされたのではないか、なのに何故、卵は呑まれ続けるのか。なのに何故、卵を思い描き続けるのか。それは、その蛇自らが内から光るために違いなく、蛇はそうして硝子の表面を行き惑う水の砕片に光を当て、それらにじっと目を留めるままでいたいのは。卵の表面にそれが似て見えるので。硝子と同じに真っ平らな殻の卵など、触れた事も呑んだ事もないが、その殻の奥に、丸々と養分を蓄える命が眠るなら卵以外ではない。その殻の奥とは、窓の向こうか、こちらか。どちらでもなさそうなら、その薄い水の膜に命が宿る。或いは、蛇の目の届きようもない別の所に、それは守られて安らい。

　ゆっくりと胎児の育つように、蛇は体を揺らしていて、巧まずとも、蛇と水の砕片の表面の間に、触れようとも出来る何かしらの丸みが帯びた。それが、

蛇と窓硝子の真ん中辺りまでを包み取ろうとする動きに乗って、蛇は、身を胎児のように丸めようとしても、あらぬ方に歪んで行き止まるばかりだが、帯びている丸みは、無疵どころか強張る蛇の体を措いて、硝子面に卵の形を浮き上がらせた。それが、蛇の光りを受けた水の砕片で描かれているのは分かってはいても、何とかそこへ潜り込めないか。しかしそれは、浮き上がり過ぎて覆るように消え、丸みもまた何処か裏の方へ覆った。投げ出されたかの蛇の体は、卵の中へ落ちた、或いは卵の殻から外へ落ちた。どちらかには違いないなら、どちらでも良い、と思えば強張る体は緩んで、滑って水のように落ちた。しかし落ちたのは、蛇が纏っていたもの共ばかりで、痩せた無様な身を晒す羽目の蛇は、凶暴さをただ一つの頼みに、窓の隙間の乳色の鳥の卵に、赤い口を差し向け、力任せに迫るしかなく。の筈が、切り刻まれても皮一枚で辛うじて繋がるように項垂れて、真下に延びる狭い溝を見下ろすばかりとは。別の窓の塞がれるために切られた溝だろうが、そこに窓がない。窓の破れた跡もない。土のきつい匂いから壁は分かったが湾曲し、溝とは隔たっている。ぴったりその溝と合う窓の形が、どのように壁に開けられるか思い描こうとして、ただ混乱する内に、どんな形であろうと必ず巧く嵌る、予めそうなる仕方で周到な湾曲が壁に施されている、と何故かそう確信出来れば、蛇もまた、どのようであっても良い、己の形を得られた気になれた。そうして改めて鎌首を擡げると、狙い

定まる乳色の中に透けるのは、胎児ではなく、水を呑んで瀕死の、しかしそうである程に蛇を凌いで凶暴な、殆ど羽も毟られて裸同然の鳥で、その飛び出そうに蛇を見詰める両目は酷く濁って、それが、長過ぎる時を掛け、余りに多くを見過ぎた証として示されているようであっては、蛇の鎌首は萎えた。見る事は詰まる所、害毒。そう思い至るしかないので。一瞬蛇は、その濁りと向き合う己の目を潰したくもなったが、目が引き受けないなら、害毒は更に体の奥に染みて来そうだし。

　そのまま真下の溝へ水のように落ちて行けたなら、と願っても虚しく、ならば鳥の死を直ぐにも見届けたいが叶わない。しかし蛇は、うっとりと生温かさの心地良い身を伸ばし、揺り籃に潜り込むように安らえた。実際その場を揺り籃とも見馴染ませて、その形はどのようでも良かったが、その縁にほんの小さな棘が。溝の端で、それはもう決して開かない目を固く塞いで、硬い尖った矢印のようになって動かない、彼方を向いて汚れた、鳥の姿だった。或いは全く別の何かか。その冷たさが、蛇の目を突き抜けて腹の奥にまで届き。そしてそれが、次は蛇の腹が狙われていると思えて仕方ない、その同じ冷たさならば、揺り籃のどのようであっても構わないその形こそ、蛇の肉を真っ先に欲し、それを一呑みにしようと狙っていない筈がない。込み上げる笑いに、無理にも浅ましく身を沿わせるしかなく。いや蛇が笑う事はない。では何が笑う。溝の端

の死んで汚れた鳥、でないなら、それに代わってまだ笑う口を持つ、汚れた腐肉を生きて眺め合う鳥、ならば何を笑う。同胞の殺され棄てられた様をしか。そのような姿を晒すために生まれて、生きて行く鳥よ。それは蛇も同じで。とは言え、そんな鳥の笑いが、仮にも蛇の腹から込み上げるだろうか。そして己の肉を食われる事を思うのであれば、たとえ笑えたとしても、それは笑う程の事でなく。抑も、食う食われる殺す殺されるなどは、一々思う程の事でもなく、明らかに過ぎて眠くもなるし、だからそれは日々の眠気の中に紛れて、退屈を押し付けて来て。それなら込み上げた笑いは何かの誤りで、その誤りを、蛇は笑いと間違えたらしい。食い殺されるのもまた、笑いのように、何かの誤りと間違われそうでもあれば、腑に落ちる。何かの誤りがその、何が誤りか分からないそのままに笑いで。揺り籃の形は愈愈定まりようもなく冷たく、それに抗えず気怠く落ちる蛇の視線は、逆さに吊られた細い柱を伝い、その僅かな揺れは止まりそうになく、余りに華奢で何の役に立つやら。それが逆さであるしかないなら、それを逆さと見る方がぐるり逆さになれば、何一つ逆さでなくなり。いやそれぞれは全て逆さだが、それを逆さと見るものが居ないだけ。な訳はなく、逆さは逆さだ、と見られてはいなければ、それは端から端まで見過ごされ、消えたも同じ。しかし鳥と違いそこは蛇。逆さなど知った事か。鳥の、死んでさえ逆さを苦にする、その高い空との腐れ縁とは。何時かは空に無残に見下ろ

されるしかない鳥の、己の死をそのようにしか思えない、空で生きてしまった鳥の重さ。水の滑るように軽みを纏う蛇には、それはない。が今、それを蛇は見た。何を見たか気にもならず、何も見なかったと同じに。

　蛇はそれで、自らが発する光りの縁を、ぼんやりとなぞれた。蛇の光りがただ一つの光りだが、光りが、ただ一つだけである筈もない。様々な光りが、様々に角度を付けて梯子のように降りて来る、か昇って行く。或いはそれらは全て透き通っていて、蛇の目に映ってはいないのかも知れない。焼けて失われた後ろ半身の疼きが、滑って寝返るように跳ねた。それは蛇の前半身へと生身のようにうねって、蛇の口の中に甘みとなって露を結び。その含むところを蛇は考え倦ねた。それでも甘みの涎は零れて止まらず、それは後ろ半身が途切れた方へ伝って。それが一所に蓄えられる重みとなって、そちらへ身を引き寄せられるように感じると、蛇は己の体の端にふんわりと丸っこい袋を着けているのを見付け、「卵ではない、卵とは違う、卵なら温かい、卵はもっと軽い、卵はもっと重い、卵なら横を向いている、卵なら縦に立っている、卵なら冷たい…」と、思い浮かぶまま卵を打ち消す言葉を連ね、その声が段々と、言葉を溶かして気怠い唸り声の続くだけになっても、その響きによって打ち消しの意味は揺るがずに。その声のせいで、蛇の身は沈み込んでいるに違いなかった、鳥なら、逆さの方へ、と感じるであろう方へ。蛇は、後ろ半身を焦がしたあの炎の燃え

滓を、長年の探し物のように堪らなくもう一度見たくなった。その探る視線は、先へ先へ止め処なく無用の闇を拡げ、それ以上先まで延ばせば、拡げた闇ごと、小さな一瞬の炎となって煌めくか、煌めきもせず己も消えてしまいそうで、目を、闇から逆さの闇へ背けた。いや目は何処へも背かない。目は歪めるのみで、炎を見たい闇も、炎の記憶と共に歪んでいないか。それに比べて、何と己の体は真っ直ぐに背筋を伸ばしている事か、と蛇はやや驚いて、その驚きをさらりと闇から隠して、頭と反対側の体の端に加わった己が身の一部である丸い袋を、冷たく真下に見下ろした。しかし冷たいのはどちらだろう。頭だったとしたら、何とも無様で出来損ないの卵のような頭。卵のようなのに、或いは卵のようなので、卵に頭の上がらない頭とは。

　その頭にそっくりな袋を引き摺るしかない無様な姿、蛇の面影もなく。傍目には恐らく、どちらが頭か判らず、何の印も見付からない棒のような胴の両端にくっ付けられた、ヌルヌルと捻くれた卵形が、牽制し合うばかりのような。そこで初めて後ろ半身は、二度と、疼きさえ甦らないまでに失われたと知れて、蛇は胴の真ん中を支点に、木切れのようにカタカタと回ってみた。その回転が、宙を矢印のように指し示す方に、長い梯子が、蛇と組んで踊るのか、やはりカタカタと回って。その梯子とは、粘り気のある白い光りで結ばれているに違いないと蛇は目を凝らす。或いは、梯子と蛇を一つに包む別の大きな袋。梯子の

向こう側に袋の口が開いていて、袋を出た所で、蜥蜴の噴く透き通った炎が行き交っているなら、回り続けるまま蛇は、それまで胃に収めた肉の命の悉くを、そこに解き放てられるか。或いはその解き放たれた筈のものを、逆に何倍にも背負わされるか。回り過ぎて向きが分からなくなった胃の底に、躊躇いだけが溜まって行くようで。ゆるゆると体が回るのは収まりそうでも、胃だけは、中のものが、どちらからどちらへ流れるのかを定められない、或いは定めたくもないために、木切れのように回り続けるしかない。カタカタと音などもしないので、それは何時か唐突に千切れて、腹を破って何処かへ飛び散るようでもあって、待ち遠しい。がまだずっと先で、そんな腹をくねらせてでも、蛇なら蛇のように這うのなど楽しい筈もなく。いや、ゆるゆるとでも独楽のように体を回しながらでなければ動けない蛇は蛇か。全く梯子とを繋ぐ粘り気のある白い光りのせいだ。いや、粘りでも光りでもなく、その白だけ。その白はあっさりと、蛇の目の白に窮まって。いくら頭を振っても、その白は蛇の目の端端まで犯し、目の玉の奥まで食い込み、頭蓋を抜け背骨まで通じる。尚頭を振るしかないその目で、体の反対の端を見ると、卵形の袋が見当たらない。縮んでただ隠れているだけと朧気に。それでもそれがそこにまだあるのを確かめないでは、蛇は声を出すのが酷く身を危うくすると思えて、すると却って何かで不意に声が出てしまいそうで、口の奥が拡がり、喉を空っぽのままにしておくのが嫌で

嫌でざらざらと。

　他にならいなら、他でもない白を飲み下して喉を満たすしかないのに、白は先回りして蛇の身を白く染め、それを振り払おうと蛇は反転を繰り返し。別に白が痛いのでも苦しいのでもないと気付いても、体の動きは已まず、寧ろそうしていて却って痛みと苦しみが生まれるようで、それとも、そうであるようである事によってそうでないような、しかしそれで白から暫し猶予を貰っているのかも知れず。袋は見付かった。酷く肥え広がっていて、その見失われていたのは、そのせい。体の端が知らぬ間に大きく膨れてしまうなど、蛇には思いも寄らず、まだそれが体の一部かどうか疑うべきだ、繋がっているだけで体の一部かと。そのままでそれは、蛇と別の事になっていて、蛇の目から隠れた方で、梯子と、蛇よりずっと密接に繋がっていたとして、蛇に何が出来るか、と言うより、それは蛇には何か。取り敢えずもちろん白、膨れた袋もその向こうに隠れた所で行われている事も、蛇の身に染まったのと同じの。であるからにはもう、蜥蜴の吐く炎も要らず。蜥蜴の炎は濁って汚い、腐った肉の臭いが耐え難い。そんなものが入り用になっても、蛇はそれを目の中に易々と映し出せるし、映し出せなくてもその映し出せない中に、それと同じものを宿せる。或いは、そうでなくてさえ構わない。それらは当面の事でもなく蛇は先ず、体がまだ反転を続けているかどうかを、見極めなければならないだろうが、白に犯された

目では、それが無理な仕事なのが歯痒く。逆さに吊られた細い柱の、余りに華奢であるので白に塞がれてさえ震えられる、その響きが届かないか。いや、何も響かなくてさえ。そのそれが、恐らくは蛇に、その望みを捨てさせないよう仕向けているだろうか。それともそうでなくてさえ蛇は、隙なく白に塞がれてさえ、蛇に係われるものとの、程良い間を取れたのではないか。或いは、そんな間などなくてさえ。つまりは脹れた袋はもう蛇ではなく。いやそれが蛇でないなら、蛇も蛇でないのかも知れず、そんな危うい所を転がっているか、転がっていないか、していられるのは、凡そ蛇に備わる強運のせいであるのかと。或いは、そんな言い回しは戯言の類と決め、つまりは蛇は、そのようでしかない何かの仕掛けに捕らわれているので。もちろんそうでなかったとしても、蛇も蛇でない蛇も、揺るぎようはない。そのようでしかないままに何も変わらない限りは。しかし、何も変わらないとは何がどうなのか、と蛇は、その指す方を探らずにはいられないが、指すとは何をどうか、探るとは何をどうかを、まるで知っていない、その仕方も見当も付かないようでは。

　諦めるしかない。諦めるとは何をどうか、とも知らず。そうして放られたかも知れない螺子の一回りのような動きを弾みにして、身を翻らせる己の姿を、どちらへともなく追っているばかりと気付く蛇の、その一身に蛇であるのは疑いなく。そうして蛇は、白をその白のまま含み込むようにして除けられたのな

ら、何れ白を吐き出さねばならず、そうなら早速吐き出すべきだがその吐くのは蛇ではなく、何処か遠くの、蛇との縁も知れない恐らくは蜥蜴とも別の生き物に任せるしかないらしく。それでも白のままの白に係わる、蛇次第の蛇に変わりはない。その蛇次第の蛇の他に、蛇の身に触れようと出来るものもない。そうでありながら例の袋は例のごとくで、蛇の輪郭を似付かわしくないままにしていたが、そうであるなら蛇にはもう、輪郭など脱ぎ捨てる用もない。その蛇の向かう所、その蛇を蛇でなくそうと脅すものは、悉く退けられ、ただ蛇だけが、一筋の力に溢れる水の流れのように押し出されて行く。それで振り返ると何処にも、振り返った己の身にさえ、蛇の姿の片鱗すら見付からないとはどういう訳だ、その驚きのまま。

　引っ掻き損ねた描線のように反り返る蛇は、身の端の袋を一気に削ぐように噛み切って、その身の勢いの輪を作る成り行きで更に身を捩り、宙の一点をその先に狙い定め、それが流れてぼやけるのなら、そこに映り出る、輪を解き掛けた己の姿に、全身をぶつけるように噛み付いた。その牙を剥く口が小さな穴をこじ開け、如何にも滑稽な程に蛇らしくギラギラした胴が波打ち、その穴を抉るようにして、蛇はどうにか食い込んだ。或いは穴などなく、ただ牙が空を裂く微かな響きに身を沿わせ、そのもう消えたかも知れない響きへと、身を押し込めようとしているか。しかしそうしてでも蛇は、ほぼ狙い定めた辺りへと、

身を移し換えられたに違いない。そうでない事を示すものも見当たらないと、その自負の身で溢れる力を余すように、ゆっくり再び輪を描いて、袋を噛み切った傷を舐め、その形をゆるりゆるりと探った。舌が、その中の小さな丸い幾らか凹凸もある柔らかい穴を突き止め、今度は力を抜くように、またゆっくりとその穴へ、尖らせた、しかし柔らかい冷たい頭を、滑り込ませて行けるようで。そして、時が短く途切れたように少しだけ、ただ分からないだけでそこに在る幾つかの事柄が、バラバラに並んで起こって、それから、その後にまた蛇の時が戻ると。

両目の直ぐ端に、透けた翼が備わって、その翼に唆されるように目に映る光りのどれもが、見えもしない空へ向かう軽みを纏い、競うようで。或いは、毒気を隠し込む、目よりずっと奥深い穴をそれぞれに銜えて、その入り組んだ危うさを競うような。それらどれもが絡み合う線で出来ていて、線の捩れた束の落とす細い影が、水の深さでも測るように真下に尖って延びて行こうとするのを、それぞれの穴の、息を継ぐような動きで引き留めていて。そこに水面の姿が紛れても、水の痕に敷かれた、様々な形に潰れた蜜が匂い立っては、尖った影も直に立ち消える。その蜜の匂いの脹らんだ方の縁の、それより先は古い月の光りが腐ってどろりと滞っているだけの辺りに、欠けたままの花が幾つか寄り添い、一塊の小さな膨らみを守って、柔らかい影を従えている。花は、蜜の

焦げる音を聞き、それに痛みを感じようと膨らむに違いなく、月の腐った光りの奥の炎の影を待ち望んで、花の色をより白く見せるための、その炎が浄めた水を、一滴だけ求めていた。ただ一滴を。その花の膨らみにも、穴が銜え込まれていて、ただそれは僅かに透ける花の塊の中の、楕円に束ねられた襞の波立つので、辛うじて見分けられ。襞の動きは、その上に閉ざされた薄い隙間を、穴の更に奥に回り込ませようと誘うようでも、隙間はただゆっくりと身を揺らすだけで、そこに張り付いて、少しずつ眠るように閉じて行くしかない。そうして隙間は消えるが、楕円をくねらせて襞の片側だけが急に強張って、次の隙間を同じ辺りにまた押し出す。初めそれは凹凸を際立たせて笑うようだが、穴の中だと観念するのか、直ぐに表情は失せ、それもまた薄く閉ざされて消えると見えたが、隙間としては消えながら、雫のように楕円の縁を流れて止まった先で、僅かに割れながら肉を得て、浅い襞となってその列の端に加わった。そうした繰り返しで、襞は古びもせずに保たれるらしい。その新参の襞である程、輝く湿り気を滲ませ、その雫となって自ずと流れ集まる方へと穴の形を歪ませ、そこだけを濡らして暗い色に変えた。それは小さな炎のようにも見え、するとそこは明るい色の肉にも見えて、その無防備な表面には、咬まれた痕が窮屈に並んで、無理にも螺旋を描きたそうだが、肉の薄さに試みは挫かれ、反り返っては縮まろうとし損なう曲線の中を、咬まれた痕の列は、彷徨うしかない。そ

の内に、その痕ばかりは一塊に脹らんで。

　そのまま、見えない程に緩やかな渦に巻き込まれそうでもあるなら、それへの備えからか胎児の形に身構えてみたが、居心地悪そうに伸び縮みを何度となく試して、その縮んだ方へ留まるまま透ける膜を薄く張り、卵の形に閉じた。それだけが、そこを剥がれて花の膨らみの銜え込む穴の更に奥へと、愈愈流れ落ちようとすると、そればかりをずっと見詰めて、石のように動じない己を見出す蛇は、己の体もまたその流れに委ねられていると感じて、温む水に浸されるように全身が痺れ。その痺れの他に蛇の姿はないと気付けば、後はただ流れのままに、胎児の形の透ける乳色の卵を追うのみで。それを迎える方の水の破片は、先ず砕けた。乳色の卵は更にその先まで流れ、砕けた水の破片を何れは全て受け入れなければならないかのように脹れ続け、もう卵形に薄く拡がる膜にしか見えないが、その影は逆に縮んで、一点に集まる勢いで濃さを増す。見下ろすままにもその点を巡ろうと出来れば、痺れであるだけの蛇も蜷局を巻けそうで。うっかり俯くままのその隙に、砕けた水の一欠片一欠片が、月の腐った光りの奥の炎をそれぞれに映し、その熱で自らも平たく細い炎を宿し、それらが破片ごと踊るように揺れると、色々な音や香りを混ぜ込んで何となく賑やかな、暖かくも冷たくもない風が誘い込まれ、蛇とは別の、何処にでも隠れるままの痺れが、その風に触れて一斉に沸き立った。いや確かに沸き立ったが極

僅かで、少しも変わらずに隠れるままでは何も起きなかったのと同じで、その何もなく均された静けさに付け入るように、偏りなくぼやけた暗い光りが滑り込んで、直ぐに死んだように止まった。痺れは逃げ果せたか。

蛇には痺れは消え、その暗い光りに浸り込んで動かないのが蛇だった。或いは痺れは、暗い光りより更に均され、その光りの上に映る影として塗り込まれているようで。動かないでいる程に、蛇は暗い光りに溶け、その暗い光りが、そのまま最早蛇ではないか。そしてその上を覆う薄い痺れは眠るようで、それに蛇の眠りを重ねれば、蛇は眠るままに少しも朽ちないで、蛇の時から解き放たれても行けそうで。しかし襲って来た眠りは、重く被さる大粒の砂の流れのようで、息苦しささえざらざらと音を立てるようでは、蛇を覆う薄い痺れは、屍となって干涸らびた己の姿が、彼方から映し込まれて来たもののようでもある。その同じ彼方を向いているに違いない、色褪せて汚れた尖った鳥が、傾いて撓んで何処まで延びて行くか見えない細い柱を伝って、蛇の直ぐ上を掠めて、蛇の眠りを破ったのか。或いは、隠れて蛇を追う艶艶とした炎が、暗い光りの静けさに耐え切れずに綻びたか。何れにしろそれで蛇は、曲がった矢印の形に身を固めさせられ、そのまま暗い光りから離れて、沈んで行くしかなく。ただだらしなく開いた口から、涎だけは切れ切れに垂れ、それはまた、別の命のようにそれぞれが身をくねらせ、暗い光りの拡がる高い方へと泳ぐ姿勢を見せた。

それを蛇は、己の位置を測るために見上げるが、測れたのはただそれらと比べられる、己の重さばかり。それ程重くもないが、蛇を取り巻くものが軽過ぎるせいで、その少しの重みが、蛇に一切を諦めさせ、その息の根を止めようとしていて、それに抗って蛇に出来るのは、涎を止めるために口を噤もうとする事だけ。いや、口を噤まなくても涎は止まっていた。そして口ももう噤んでいた、その口は、それも曲がった矢印の形に固まって、その重さに蛇の体は下を向き、更に沈んで行きそうで、

抜け殻だけがそこにそのまま残るなら。いや抜け殻ではない、それなら抜け殻だけが沈んで行くのだとして、何が残るのか。それを知るには先ず、蛇は下を向くのを已めようと、曲がった矢印の形に固まった体の内に、暗い光りの残り滓を見て取ろうとした。そしてそれらしきものは確かに、水に沈んだ切れ切れの薄い膜のように揺らめいて、その僅かな光りを暈かして、水に溶かそうともするようだが、それらは、知らぬ間に蛇の体に入り込んだ異物かも知れず。蛇にはそれが、それ自らによって光るより、外からの光りを浴びていると見えた。それは、蛇の体からでも月の腐った光りの奥の炎からでもなく、もっと別の、光りにしては余りに濁ってどろりとして、ただそれに触れるものしか照らせそうにない、形の定まらない泥の固まりのような光り。或いはそれが光りならのではなく、それに触れるものを照らす微かな光りを探り当て、その光りを

どろりと擦って、輝かせているだけか。そうなら、それが触れるその感触にしか、その光りの正体は知り得ず、そこへ身を潜り込ませでもしない限り、蛇には何も知りようがなく。そしてそれらは、無力な蛇を尻目に、蛇には知れないその光りの元に、水に沈んでいるのならその水を少しも揺らさずに、ゆっくりと形を整えて、一つに纏まる動きを続けた。しかしそれはある段階で滞るのか、或いは纏まり切らないような形がその望まれた形なのか、蛇には何処か中途に見える姿で、同じ動きの中に閉じ籠もった。しかしその光りは、確かに一纏まりに繋がるままにはなっていて、斜めから見られているように見える五角形が身をくねらせ、その五つの角が先から急に暈かされて少し脹れ、それぞれ、水を舐める舌の形に丸まりながら一斉に掻き消えるなら、恐ろしく細い、しかしくっきりとした白い線で編まれた網目が替わりに浮き上がり、それが風に千切れて消えるような先に、斜めの五角形の光りが、何処からか捕らわれて来て、また身をくねらす、その繰り返し。蛇に出来るのは、体を揺らして、それらが水に沈んでいるのなら、その水を揺らしてみる事だけか。そうはしてみたいが、そうしているのかどうかも分からないが、しかし沈んでいるのが、己の抜け殻なのかそうでないかさえ分からないでは、それも仕方ない。そう諦めると、その光りの動きの繰り返しは、少しずつ小さくなって遠ざかって行くらしく、蛇がその距たりを測ろうと、それとの隙間が出来ていそうな辺りに目を向けると、

くっきり見出されるその隙間はしかし、その光りの動きの中の何処かに設えられた、それまで全く見えていなかった隙間で、仕掛けられた罠であるかのように、蛇をあっさりと迎え。

ひょっとして抜け殻が、こっそり脹れながら形を整え、綻びを繕い硬さも増して、蛇を捕らえようと待ち構え、それにまんまと嵌ったか。いやそんな詮索は要らないと直ぐに捨てた。しかし何を捨てたのか、と蛇は直ぐに悔やんで、それは取り返しが付かず、ずっと尾を引くに違いないとまた悔やむと、それが、固まっていた蛇の体を弛めるようで、自ずと蛇は首を擡げ、見上げようとも出来た。それで見上げているかどうか分からないが、そうして見上げているのが、見上げるべき方向に違いないと決め付ける事は出来て。そうして見上げた見上げるべき方向はしかし、ただ見失われ、消えて行くだけ。当てずっぽうのままに決め付けたのが早計に過ぎたらしいが、それは悔やまれはしなかった。恐らく、弛められた体を隙間一杯にのたくらせ、何かの幾つかの記号にも見えるように象らせて、それらを上下左右に回して見せる事が出来たからだ。いや幾つかと見えたのは、ただ一つの形が転げ回って、違った形を次々示していると見えただけか。それらを蛇は、己の抜け殻らしいその内側に映るものとして見ていた。しかしどうも、そこに己を映す鏡が据えられているのではなく、実は蛇の体は、まだ曲がった矢印の形のままで、その抜け殻の内面に映り出た蛇の姿

の柔らかさに、己を重ねてしまっただけ。では曲がった矢印の形は、と見回しても見付からないし、その見回す己の姿形を、蛇の体として確かめも出来ず、自らの重みがくるくる回りながら見失われて行く事しか確かめられない。それは何だろうと自問すれば、勿論それは自問ではなく、蛇と別の事を問うてしまったかも知れないが、敢えて自問と押し通す程に、その問いにばかり重みが移って、それがゆっくりと沈んで行くのだけが、そこに残るようで。それでそれが問いであるとも見えなくなり、沈むのは沈もうとする何ものかでしかなく、その何処にも蛇らしさが見出されない、その蛇らしさとは、

　まさか抜け殻、そのまさかは余分の、何もない中に蛇を落とし込んで、蛇に蛇らしさを分からなくさせた何か。それが蜷局でも巻けば蛇らしいが、いや蜷局くらいはあっさり巻いて。それは常に動いていた、動きの中に掠め取ったものを隠すために。止まったら最後、ずっと貯め込まれていたものが一斉にぶちまけられる筈もなかろうが、それでも、それに掠められずに仕舞いで解き放たれたものなどが、次々に凶暴に溢れそうな気配はあり、抜け殻の内面に映る蛇は、それを恐れてか、上下左右に回る速さを増したそうでも、それが叶わず焦りの色を滲ませる。それは唾に微かに混じる血のような薄い色で、その色の滲む所とそれより滲まない境が緩やかな曲線を引き、それは面を拡げて、薄紅色の糸のように細い線の、網目模様を浮き上がらせた。その網目の面が硬そうな艶を

出して曲がって閉じて整う形は、ずんぐりとした六角柱で、蛇の姿をその奥へ閉じ込めた透き通った石に見え、ゆっくり回ると、立方体にも、球体にも、また無造作に切り出されたままのゴツゴツした特徴のない石塊にも、見掛けを変えた。それに従って蛇の姿も、見ようでは、蜥蜴になったり海星になったり海月になったり、竜の落とし子にも似たりするが、石の形が一巡して六角柱に戻る時には、記号のような蛇の姿が復って来た。ただ止まってはいないらしいが、酷くゆっくりとしか回らず、或いは回るように見せ掛けるだけで、そのままた蛇とは別の形になってしまい、その蛇に戻っている間の姿も、蛇でもなく記号でもない、別のものの姿形が映し出されているのではと疑われた。そしてそう疑う事で、まだそこから消え去ってはいないとだけは、己を確かめられたらしい蛇だが、その蛇であるのも疑われなければ済むまいと、疑うものと疑われるものの境も疑われ、水の中に暈かされても行きそうな。

水は常に疑いを拒むので、それで却って、暈かされた蛇の確かさを、黙って匿うような恰好で。水は、月の腐った光りは受け容れて、それは遥か前から水に親しく混ざり込んでもいて、そのせいで長過ぎる病を得たかのように、何処か静かに安らえる岩盤の奥に延びる穴でもないかと、更に深く透き通るため、身を硬く締めに掛かっていたが、月の腐った光りの奥に燃える炎か、その尖って煌めく細かな燃え滓によって、先を阻まれていた。しかし寧ろ、身を忍ばせ

たいのは、炎か燃え滓の方ではないか。いや既にこの上なく水の奥に忍んでいたのに、急な蛇の訪れに、その隠れ処を掻き回された。確かに蛇には、そんな水に触れるのが新しかったが、それは、その水と光りの結び付きに、計り知れない古さを覚えたせいで、そこには音を通さない蛇に聞けない言葉が交わされていそうで。もしそれが蛇に聞き取れたら、己の重みが見失われて行くのを、曖昧にそれを誤っているとも承知で自問として問うて済ませた、その問いが、蛇を通さず、裸のままの水と光りに関わる問いとして、水と光りの間を行き交っていそうな。或いは行き交いなどせず、問いの向く傾きをそれ自らが探って、常に問いだけの力で動いて、問いと問いが互いの傾きの美点などを、盗みながら切り裂きながら契りながら、水も光りも置き去りにして顧みず、その先まで流れて渦を巻いてもいそうな。もしそうなら蛇は、聞き取れなくとも音など踏み越え、その問いばかりの絡み合う辺りへと、泳いで行けないか。その泳ぎ方、その向かうべき傾きについても、蛇はきっと何処かで、未だ若く真っ新だった頃に見せられたか学んだかして、恐らくは既に身に付けていないか。そして蛇はもう、それらの問いの渦に身を沿わせ、己もまた一つの問いになって、新しい傾きを引き延ばそうともしている。その引かれたばかりの線に映える無垢の色まで見て取れそうで。そう思えてしまって蛇は、静かにそっと、そこに於ける己の全てを拒まれた。果てたかとばかりにしか問われないその問いの、そっ

と失せる事によって。独り蛇だけのその新しい傾きは残って、蛇の目の奥に刻まれようとも、それを決して蛇は、己のものとして受け取れそうにない。そこには、水と光りの古さと蛇を隔てるより、更に計り知れない距たりが、蛇を打ちのめし、蛇自らさえ、その疎さに加わる距たりの一角を占めていて、蛇にとってその傾きは、どんな彼方の見知らぬものより馴染めないままに、その身の奥へ食い入り、血の中へも流れ。それによる痛みも苦しみも悔いも自虐の味も少しも感じられず、それがまたその疎さを扱いようもなくさせた。そしてその扱いようのなさも、それがそれの妨げとなって、蛇を拒めば。

　岩盤の奥へと延びる、何かの弱々しい長い影にも、裏返されたかに歪んだ空っぽな拡がりにも見える、斜めを向いて薄っぺらな細い楕円が、そのまま蛇の体で。それを確かめようとする程、それは逃げるように弓なりに曲がって、更に細く尖って奥へ延び。その特に当てもなさそうに曲がって行くばかりなのは、珍しく蛇を喜ばせもし、先を急げばそれだけ早く見失われるかも知れないのに、希望の光りでも追うようで、蛇を昂ぶらせ。しかしその蛇の体は、当てのない曲がり方を已めないせいで、跡を残さない。螺旋となって先へ切り込むのか、一筆書きを試すばかりなのか、縺れているようでも何度も同じ所に戻って環を閉ざしているだけか、飽くまで出鱈目か、既に規則に縛られているか、そのどれであろうと、蛇は受け入れる積もりになれるし、どれでなくても構わない。

ただその何処へか曲がり続けて、それが水の中の月の腐った光りを抑え付けているらしく、その働きだけは失いたくない。或いは光りではなく、その光りの何処へか移って行こうとするその動きを抑えていて、蛇は、己の体の曲がり続ける様を、それへ被さる覆いのようにも思い描けた。しかし、別の側で底が抜けていたのでは徒労だ。水と光りの端までを覆える筈もない。まさかその曲がる軌跡を織り上げるかして、果てのない覆いを装い、水と光りを見下ろす高みで、終わらない舞を舞ってでもいるか。それなら余りに無防備で取って返すべきだが何処へ。曲がるのさえ当てもなく、返す方向など分かる筈がないなら、楕円の体の曲がり続けるここに、巣を拵えるしかないか、それは却って危うい、わざわざ居場所を知らせ、危険は巣の向こうに隠れてしまう。蛇は、問いの渦に身を沿わせた際の、泳ぎ方を思い出そうとした。しかしそれの、どのそれか知れないが、それの扱いようのなさだけが、蛇の望む事を妨げるばかり。蛇にとってのその妨げこそが、何処へか少なくとも幾らかは危なくない方へと、蛇を通して行くようで、そうして蛇に岩盤の終わりの、その岩盤を熱と重さで断ち切った、より硬い垂直な岩盤を抜ける別の入り口を見せた。目を凝らすとその中に、細い線の網目模様がゆらゆらと斜めに延び、その先で、薄紅色を反転させてまた薄くさせた色が暈かし込まれた、見知らぬ、空っぽな拡がりが、静かに蛇を待っているのが覗けたが、蛇はそれとの疎さの、その扱いようのなさに

身を捩るしかなく。その身の捩れるのと、弓なりに曲がり続ける動きとが、どう繋がるのか、背き合うのか、まるで測り兼ねても。

　干涸らびた虫の羽が柔らかい風に運ばれる僅かな塵で破れるように、蛇を通り抜けさせた岩盤が軽々と砕け散っているのは、振り返るまでもなく、それをそうしたのが、蛇であり、蛇を妨げるものでもあり。何故なら蛇には覚えがあって、蛇と蛇への妨げは、そこに挟まれた岩盤さえ、いや硬く厚い岩盤をこそ、黴虫の腑をサラサラの粉にして吹き払い骸を空っぽにして転がすようにして、黴臭い狭い方の暗がりへ投げ捨てる癖があって、その度に、襤褸と裂けて切れ切れの岩盤は、埃一色に埃を塗した虫の骸の後塵を拝するばかり。水は疾っくに見限って、黴臭くも狭くもない、水の冷たい暗さを拡げられる方へ流れ、大き過ぎて見晴るかせない渦へと傾けば、水以外の動きを全て振り落とし、覗き込む蛇の目に疎さしか映さない。ただ垂直な岩盤の方は無傷で、その遥か下へ水を沈めて乾き、白々と透き通って天を衝いて聳え立った。蛇はそれで、水に惹かれて奈落へ落ちるのでもなく、その透ける中へ目を凝らせば、それと距てられるままにそこに居られた。白々と透ける中は、紙のように薄くドブの底のように濃く輝く雲が、粘っこく勝手放題に細く伸びて入り乱れるようで、それは、警戒を怠らずにじっくりそこを巡る、岩盤の黒い血の流れに違いなく、同じ血が蛇にも巡っていて、蛇はドブの底より更に黒々とした己を思い描きながら、

その入り乱れて動く流れのままに身を傾かせようと。いや、そうしている積もりなだけで、刃物のように垂直に突き上がる空きっ腹が、その外と内の血の一切を司って、蛇の形と動きを決めて仕舞うしかなさそうで。その空きっ腹が、垂直のままが苦しそうに、硬い刃は突然、鞭になって唸った。それは、急峻な岩盤の天辺から底までを斜めに一振りに打ち据えるようでも、掠りもしなかったか。しかし振るわれたのが、撓りのある蛇の体なのは明らかで、冷め切った空きっ腹を温かい塊が流れ込んで満たすと、蛇を妨げるものは、恐らくそこにあるままでも、呆気なく隠れた。蛇は、明るさも暗さも暈かされた、塵だけが煌めく虚ろな拡がりへ向け、ただ撓るに任せて鞭のように身を抛てた。そして、そこだけその掠りもしない一隅に蛇が気付くと、その辺りが、垂直に立つ楕円の輪郭を際立たせて白く透け。表面を水に削られた角の痕が幾つか浮かんで、元はずんぐりした六角柱と見えた。それが、垂直の岩盤に見えていた全てであるに違いない。大きさは比べようもないのに、その楕円が、天を衝く岩盤とそっくり同じ位置を占めていれば。変わらずその中を巡るままの黒い血は、何処かの深く隠れた、ずっと古い岩盤の流れを引いていそうで。

　その繋がりの徴を、見出せなくても、感じさえ出来なくても、蛇は己の内にそれが紛れ込んでいるのを打ち消せず、それが楕円の中の血の奥を覗くのを躊躇わせた。或いは始祖より負わされた蟠りなどが蛇を苛んでいるか、それが分

からず仕舞いで、空きっ腹も当てにはならずに、別の途を探れようか。逆にそれが運を啓かせているとも考えるなら、鞭の体でそれを打とうとするのを已め、目を背けながらでも、それに寄り添い、巻き付かずにいられるか。脅されてでもいるかのよう。その疑いが蛇の身を重くし、そののろのろと増す重みが正確に知らされる程、蛇は、楕円の奥が疎らに濁って行くのが、己のせいだと悔やむしかなく。いや知らされるのは身の重みではなく、その濁りが何処へか産み出す重みで、それが段々と重なれば蛇殺しの仕掛けがいきなり間近に転げ出そうで、それへの備えとして、鞭の体に粧いを凝らし、蛇の姿は消すべきでも、紅などなければ己の肌から黒い血を滲ませ、固めながらそれを身に塗りたくり、蜈蚣に化け。その蜈蚣の脚で、楕円の奥の濁りとそれに纏わり滞る黒い血の上っ面を這って、そこを石に変え。しかし厚みのない額はもう、薄紅色の細い線の網目模様を滲ますその白い楕円の石の一撃に、打ち据えられた後で。それでも蛇はぬるりと斜めに緩い弧を刷き、暗さに惹かれるまま水の方へ戻る構えを仄めかし、乾いた闇の縁に水の深さを測ろうと身を長々と晒して、額の打たれた痕は、炎のように浮き立った。その己の姿を全て分かっていながら、それが何に向け何を示しているかが、全くぼやけたままで、己の姿の何を分かっている筈もない。ならば、その晒される己の身こそ暈かされて、水の影の欠片と壊れて消えないのは妙ではないか。或いはその長く柔らかい身は既に石。逆に楕

円の硬い石は既に蛇。その行き違いなしに、蛇も石もここにはあり得ないとしたら。白い石の緩やかな丸みの上に、蛇の額の血の痕が、胎児のような矢印を示して、だからまだその薄っすらとした形には、行き違いの向きは表せず。（二〇一〇年五月十四日）

微睡みに蜷局を

著者　u_

© 2010 u_　但シ死後ノ著作権ハ放棄スル。

Independently published